

〈はしがき〉

講数通りに授業を進めていきます。また、一講以外は予習必要です。予習する場合、夏までは単語帳(辞書)を使用してかまいません。

〈第一講〉

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

下わたりに、品いやしからぬ人の、こともかなはぬ人をくからず思ひて、年ごろふるほどに、親しき人のも、とへ行き通ひけるほどに、むすめを思ひかけて、せみそかに通ひありきけり。めづらしければにや、はじめの人よりは心ざし深くおぼえて、人目もつつまず通ひければ、親聞きつけて、「三年ごろの人を持ちたまへれども、いかがはせむ」とて、許して住ます。

もとの人聞きて、「今はかぎりなめり。通はせてなども、よもあらせじ」と思ひわたる。「行くべき所もがな。つらくなりはてぬさきに、離れなむ」と思ふ。されど、さるべき所もなし。

今の人の親などは、おしたちて言ふやう、「妻などもなき人の、せちに言ひしにあはすべきものを、かく本意にもあらでおはしそめてしを、くちをしけれど、いふかひなければ、かくてあらせたてまつるを、世の人々は、『妻すゑたまへる人を。思ふと、さ言ふとも、家にすゑたる人こそ、やごとなく思ふにあらめ』など言ふも、やすからず。うげに、さることはべるなど言ひければ、男、「人数にこそはべらねど、心ざしばかりはまさる人はべらじと思ふ。かしこには渡したてまつらぬを、おろかにおぼさば、ただ今も渡したてまつらむ。いと異やうになむはべる」と言へば、親、「さだにあらせたまへ」と、おしたちて言へば、男、「あはれ、おかれもいづちやらまし」とおぼえて、心のうち悲しけれども、今のがやごとなければ、「かくなど言ひて、気色も見む」と思ひて、もとの人のがり往ぬ。

() 『はいずみ』

(注) ○妻すゑたまへる人を——「妻すゑたまへる人を」通わすとは、の意。

○や」となく——「やん」となく」に同じ。

〔設問〕

(一) 傍線部(ア)・(イ)を現代語に訳せ。

(二) 「げに、さることにはべる」(傍線部(ウ))とはどういうことか、具体的に説明せよ。

(解答欄：約十四センチ×二行、(三)も同様)

(三) 「さだにあらせたまへ」(傍線部(エ))とあるが、どうしてほしいのか、具体的に説明せよ。

(四) 傍線部(オ)を、「かれ」がだれを指すかわかるように、現代語に訳せ。

〈第二講〉

□ 次の文章は音楽に関する教訓を述べたものである。これを読んで、後の設問に答えよ。

古きやんごとなき人の仰せられしは、「諸道には地獄あり、その価あたいあるがゆゑに。管絃くわんげんには地獄なし、料物りょうぶつなきがゆゑに」。

うれしくも罪なきことをしけるかな数ならぬ身はこれぞかなしき

かやうのことなりとも、人の心に随したがひて、罪あるさまにもしなすべし。あなかしこあなかしこ、その有様は永く思ひ寄るべからず。好まん人には隠すべからず。その器物かなひたらん人には惜しむべからず。月の明あかからん夜、よもすがらあそびては、腹立たしからんことをも忘れて、「極楽浄土の鳥の声も、風の音も、池の彼も、鳥のさへづりも、これがやうにこそはめでたからめ。とくとくまゐりてこれを聞かばや」と思ふべし。

かやうならば、功德は得うとも、罪にはなるべからず。また、これをあながちに隠して、人ひとにはわろうせさせて、心内には言ひそしり笑ひて、「われひとり人は人にすぐれん。さてよにいみじきものに言はれて、これをせうとくにせん」と思はば、などか罪もなからん。されば、心によるべしとは思ふなり。

(『竜鳴抄』)

(注) ○せうとく——所得。儲け。

〔設問〕

(一) 傍線部(イ)・(ウ)・(オ)を現代語に訳せ。

(二) 「管絃には地獄なし、料物なきがゆゑに」(傍線部(ア))とはどういうことか、説明せよ。

(解答欄：約一四センチ×二行)

(三) 「かやうならば」(傍線部(エ))とはどういうことか、説明せよ。

(解答欄：約一四センチ×一行)

□ 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

ある人はいはく、もとよりその道々の家に生まれぬるは、さることなり。さなきたぐひも、ほどほどにつけては、能は必ずあるべきなり。中にも氏をうけたる者、芸おろかにして氏を継がぬたぐひあり、道にあらざるたぐひ、能によりて道に至る徳もあれば、氏を継がむがため、道に至らむがために、「かれもこれもともにはげむべし。」何となく交はりたる折はそのけぢめ見えざれども、芸能につけて召し出だされ、「ただうちあるわれどちの遊び、かたへに抜き出でて何事をもしたらむは、雲泥の心地して、人目いみじく覚えぬべし。」すべてみめよく品高けれども、あやしくいやしきが能あるに立ち並ぶ折は、「その品そのみめも必ず思ひけたるものなり。」たとへば、花のあたりの常磐木は、うち見るにたとへなく「さめたれども、春の日数暮れ、峰のあらし過ぎぬるのちに、緑ばかり残りて、仮のほひとどまらざるがごとし。」されば、「桃季は一旦の栄花なり。松樹は千年の貞木なり。」といへり。いみじくありて身の能なきが一人あるを見るだに、能あるを思ひ出づるならひなり。いはむや、能に並ぶ折のけぢめをや。いかにいはむや、同じ様なるが一人は能ありて、一人は能なきをや。中にも世の中の変りゆくさま、昔よりは次第に衰へもてゆくにつけつつ、道々の才芸もまた父祖には及びがたき習ひなれば、

「藍よりも青からむことはまことに希なりといへども、形のごとくなりとも箕裘の業を継がざらむ、くちをしかりぬべし。」

(『十訓抄』)

(注) 箕裘の業——父祖の遺業。

〔設問〕

(一) 「かれもこれも」(傍線部(ア))は、それぞれ何を指しているか。

(二) 傍線部(イ)・(ウ)。(エ)を現代語訳せよ。

(三) 「桃李は一旦の栄花なり。松樹は千年の貞木なり」(傍線部(オ))について、「桃李」と「松樹」はそれぞれ何をたとえているか。

(四) 「藍よりも青からむこと」(傍線部(カ))は、ここではどういうことを指すか、説明せよ。

(解答欄：約一四センチ×一行)

〈第三講〉

□ 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

よろづのこと心細く覚え給ふままに、ただこのことのみ御心にいそがれ給ひつつ、出で給ふたびごとには、女君に、「法師になりて山へまかるぞ」ときこえ給ひければ、「例のこと」と、たはぶれにおぼしてなむ、きこえ給ひける。「まことにこのたびは」ときこえ給ひければ、「例の夜さは帰り給へらむをこそは、法師かへるとは見め」ときこえて笑ひ給ひければ、「まことぞや」ときこえて出で給ひければ、女君、「法師にならむと侍るは、われをいとひ給ふなめり」とて、

あはれとも思はぬ山に君し入らば麓の草の露とけぬべし

ときこえ給へば、高光の少将の君、

わが入らむ山の端になほかかりたれ思ひな入れそつゆも忘れじ

と申し給ひて、愛宮の御もとにまうで給ひて、立ちながら出で給へば、「物きこえむ」とのたまひければ、「まなどえのぼり給はぬ」ときこえ給ひけれど、涙も出で給ひければ、「いそぎ物へまかる」ときこえ給ひて、ことなることもきこえ給はで出で給ひて、比叡にのぼり給ひて、御弟のおはしける室におはして、とう禪師の君を召して、「かしら剃れ」とのたまひければ、いとあさましくて、禪師の君、「などかくはのたまふ。御心変りやし給へる」とて、のたまふままに泣き給ふ。

(『多武峰少将物語』)

〔注〕○女君——高光の妻。

○愛宮——高光の妹。

○禪師の君——高光の弟。

〔設問〕

(一) 「ただこのことのみ御心にいそがれ給ひつつ」(傍線部(ア))を、「このこと」の内容が明らかになるように現代語に訳せ。

(二) 傍線部(イ)・(ウ)を現代語に訳せ。

(三) 「などえのぼり給はぬ」(傍線部(エ))を、「のぼる」の内容が明らかになるように現代語に訳せ。

□ 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

世の物知り人の、人の説とくしやうのあしきをとがめず、一むきにかたよらず、これをもかれをも捨てぬさまにあげつらひをなすは、多くはおのが思ひとりたる趣をまげて、世の人の心に、あまねくかなへむとするものにて、まことにあらず、心ぎたなし。たとひ世の人は、いかにそしるとも、わが思ふすぢをまげて、したがふべきことにはあらず。人のほめそしりにはかかはるまじきわざぞ。大かた一むきにかたよりにて、他説あたしきをば、わろしとがむるをば、心せばくよからぬこととし、一むきにはかたよらず、他説をも、わろしとは言はぬを、心広くおいらかにて、よしとするは、なべての人の心なめれど、かならずそれさしもよき事にもあらず。よるところ定まりて、それを深く信ずる心ならば、かならず一むきにこそよるべけれ。それに違へるすぢをば、とるべきにあらず。よしとしてよるところに異なるは、みなあしきなり。これよければ、かれはかならずあしきことわりぞかし。しかるを、これもよし、またかれもあしからずと言ふは、よるところ定まらず、信ずべきところを、深く信ぜざるものなり。よるところ定まりて、それを信ずる心の深ければ、それに異なるすぢのあしきことをば、おのづからとがめざることあたはず。これ信ずるところを信ずるまめごころなり。人はいかに思ふらむ、われは一むきにかたよりにて、他説をばわろしとがむるも、かならずわろしとは思はずなむ。

(『玉勝間』)

〔設問〕

(一) 傍線部(イ)・(ウ)・(エ)・(カ)を現代語に訳せ。

(二) 「一むきにかたよらず」(傍線部(ア))とはどういうことか、説明せよ。

(解答欄…約一四センチ×一行、(三)も同様)

(三) 「それ」(傍線部(オ))は、どのような内容を指すか。

(四)

「かならずわるしとは思はずなむ」(傍線部(キ))について、なぜそのように言えるのか、説明せよ。

(解答欄：約一四センチ、七センチ各一行)

〈第四講〉

次の文章は、都から九州に渡った姫君が、土地の豪族に結婚を迫られ、取るものも取りあえず、その地から逃れて帰京するという話の一節である。文中の豊後介は、姫君の乳母の長男である。これを読んで、後の設問に答えよ。

かく逃げぬるよし、おのづから言ひ出で伝へば、負けじ魂にて追ひて来なむと思ふに心もまどひて、早舟といひて、さまことになむ構へたりければ、思ふ方の風さへ進みて、危きまで走り上りぬ。ひびきの灘もなだらかに過ぎぬ。「海賊の舟にやあらむ、小さき舟の飛ぶやうにて来る」など言ふ者あり。海賊のひたぶるならむよりも、かの恐ろしき人の追ひ来たるにやと思ふにせむ方なし。

うきことに胸のみ騒ぐひびきには、ひびきの灘もさはらざりけり

川尻といふ所近づきぬと言ふにぞ、すこし生き出づる心地する。例の、舟子ども、「唐泊より川尻おすほどは」と、うたふ声のなさけなきもあはれに聞こゆ。豊後介、あはれになつかしううたひすさびて、「いとかなしき妻子も忘れぬ」とて、思へば、「げにぞ、みなうち捨ててける。いかかなりぬらむ。はかばかしく身の助けと思ふ郎等どもは、みな率て来にけり。我をあしと思ひて、追ひまどはして、いかがしなすらむ」と思ふに、心幼くもかへりみせで出でにけるかなと、すこし心のどまりてぞ、あさましきことを思ひつづくるに、心弱くうち泣かれぬ。

(『源氏物語』)

〔注〕○ひびきの灘——播磨灘。航行の難所であった。

○川尻——淀川の河口の地名。

○唐泊——播磨国の港の名。

○おす——舟の櫓を押す。

〔設問〕

(一) 傍線部(ア)・(ウ)を、内容が明らかになるように現代語訳せよ。

(二) 「ひびきの灘もさはらざりけり」(傍線部(イ))にはどのような気持ちがこめられているか、説明せよ。

(解答欄：約一四センチ×一行)

(三) 「あさましきこと」(傍線部(エ))とはどういうことか、具体的に説明せよ。

(解答欄：約一四センチ、七センチ各一行)

〈第五講〉

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

初秋風けしきだちて、艶ある夕暮に、大臣渡り給ひて見給へば、姫君、薄色に女郎花などひき重ねて、几帳に少しはづれてゐ給へるさまかたち、常よりもいふよしなくあてに匂ひみちて、らうたく見え給ふ。御髪いとこちたく、五重の扇とかやを広げたらむさまして、少し色なる方にぞ見え給へど、筋こまやかに、額より裾までまよふ筋なく美し。ただ人にはげに惜しかりぬべき人がらにぞおはする。几帳おしやりて、わざとなく拍子うちならして、御箏ひかせたてまつり給ふ。折しも中納言まゐり給へり。「こち」とのたまへば、うちかしこまりて、御簾の内にさぶらひ給ふさまかたち、この君しもぞまたいとめでたく、あくまでしめやかに、心の底ゆかしう、そぞろに心づかひせらるるやうにて、こまやかになまめかしう、すみたるさまして、あてに美し。いとどもてしづめて、騒ぐ御胸を念じつつ、用意を加へ給へり。笛少し吹きならし給へば、雲ゐにすみのぼりて、いとおもしろし。御箏の音ほのかにらうたげなる、かきあはせのほど、なかなか聞きもとめられず、涙うきぬべきを、つれなくもてなし給ふ。撫子の露もさながらきらめきたる小桂に、御髪はこぼれかかりて、少しかたぶきかかり給へるかたはら目、まめやかに光を放つとはかかると見え給ふ。よよろしきをだに、人の親はいかがは見なす。ましてかくたぐひなき御ありさまどもなめれば、よにしらぬ心の闇にまどひ給ふも、こ
とわりなるべし。

(『増鏡』)

〔注〕○大臣——右大臣山階実雄。

○姫君——実雄の娘、信子。

○中納言——佶子の兄、公宗。きんむね

○心の闇——「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（『後撰集』藤原兼輔）による。

〔設問〕

(一) 傍線部(ア)・(ウ)を、だれのこと明かになるように現代語訳せよ。

(二) そぞろに心づかひせらるるやうにて」（傍線部(イ)）とはどういうことか、説明せよ。

(解答欄：約一四センチ×一行)

(三) 「つれなくもてなし給ふ」（傍線部(エ)）とあるが、だれがどのような気持で、どのようにしたのか、わかりやすく説明せよ。

(解答欄：約一四センチ×二行、(四)も同様)

(四) 「よろしきをだに、人の親はいかがは見なす」（傍線部(オ)）とはどういうことか、説明せよ。

〈第一講〉

次の文章を読んで、次の設問に答えよ。

むかし相如しやうじよといふ人ありけり。世にたぐひなきほどに貧しくて、わりなかりけれど、よろづの事を知り、才学ならばなうして、琴をぞめでたくひきける。卓上孫といふ人のもとに行きて、月の明かき夜もすがら琴をしらべてゐたるに、この家あるじの娘に卓文君と聞こゆる人、あはれにいみじくおぼえて、常はこれのみめで興じけるを、この文君が父母、相如に近づくことをいとひ憎みけれど、琴の音をやはれと思ひしみにけむ、この男にあひにけり。女方の父、よろづのたからに飽きみちて、世のわびしきことを知らざりけり。かかれども、このわび人にあひ具したることを、いと心づきなきさまに思ひとりて、いかにも娘のゆくへを知らざりけれど、つゆちり苦しと思はでなむ、年月を過ぐしける。この夫、蜀しよくといふ国へ行きける道に、昇仙橋しやうせんけうといふ橋ありけり。それを歩み渡るとて、橋柱に物を書きつけけり。我、大車肥馬に乗らずは、またこの橋を帰り渡らじと誓ひて、蜀の国にこもりけり。そのち思ひのごとくめでたくなりてなむ、橋を帰り渡りたりける、女、年ごろ貧しくてあひ具したるかひありて、現しき、うとき世の中の人々にも、たぐひなくうらやまれける。

沈みつつわが書きつけしことの葉は、雲にのぼるはしにぞありける
心長くて身をもてけたぬは、今もむかしもなほいみじくこそ聞こゆれ。

(『唐物語』)

(注)○相如——司馬相如。前漢の人。

〔設問〕

(一) 傍線部(ア)・(イ)・(ウ)を現代語訳せよ。

(二) 「我、大車肥馬に乗らずは、またこの橋を帰り渡らじ」(傍線部(エ))とはどういうことか、説明せよ。

(解答欄：約一四センチ×二行、(三)も同様)

(三) 「雲ゐにのぼるはし」(傍線部(オ))とは何をいおうとしているのか、説明せよ。

〈第二講〉

次の文は『住吉物語』の一節である。女主人公の姫は事情があり、心ならずも父中納言の家を出奔して摂津の住吉すみやしに隠れ住み、彼女を片恋する男主人公の中將は、彼女の行方を神仏に祈って捜している。話は、従者たちをともなつて初瀬はつせ(長谷寺)に参籠した男主人公が、暁がたに靈夢を得るところに始まる。これを読んで、あとの問に答えよ。

春秋過ぎて、九月ばかりに初瀬に籠もりて、七日といふ、夜もすがら行ひて、暁がたに少しまどろみたる夢に、「やんごとなき女、そばむきて居たり。さし寄りて見れば、我が思ふ人なり。嬉しき、せんかたなくて、「いづくにおはしますにか、かくいみじきめを見せ給ふぞ。いかばかりか思ひ嘆くと知り給へる」と言へば、うち泣きて、「かくまでとは思はざりしを。いとあはれにぞ」と言ひて、「今は帰りなん」と言へば、袖をひかへて、「おはしましどころ、知らせさせ給へ」とのたまへば、

わたつ海のことも知らず侘わびぬれば住吉とこそ海人あまは言ひけれ

と言ひて、立つをひかへて返さずと見て、うちおどろきて、夢と知りせばと、悲しかりけり。

さて、「仏の御しるしぞ」とて、夜の中に出でて、「住吉といふ所、尋ねみん」とて、御供なるものに、「精進のついでに、天王寺、住吉などに参らんと思ふなり。をのをの帰りて、この由を申せ」と仰せられければ、「いかに御供の人なくては侍るべき。捨て参らせて参りたらんに、よき事さぶらひなんや」と慕ひあひけれども、「示現しげんをかうぶりたれば、そのままになむ。ことさらに、思ふやうあり。言はんままにてあるべし。いかに言ふとも、具すまじきぞ」とて、御隨身一人ばかりを具して、淨衣のなへらかなるに、薄色の衣に白き単ひとへ着て、藁沓わらぐつ、脛巾はばきして、竜田山越え行き、隠れ給ひにければ、聞こえわづらひて、御供のものは帰りにけり。

(注)○捨て参らせて参りたらんに——お供申し上げずに邸に帰参したなら、の意。

○示現——神仏が靈驗を示すこと。お告げ。

問一 傍線部(1)(2)を現代語訳せよ。(解答欄Ⅱ各タテ13センチ×ヨコ1.5センチ)

問二 傍線部(A)(B)を、適当に言葉を補いながら現代語訳せよ。(解答欄Ⅱ各タテ13センチ×ヨコ3.5センチ)

問三 文中の和歌を、その技法に留意しながら解釈せよ。(解答欄Ⅱタテ14センチ×ヨコ5センチ)

問四 波線部を、適当に言葉を補いながら現代語訳せよ。なお、「夢と知りせば」は「思ひつつ寝ればや人の見えつらむ
夢と知りせばさめざらましを」という古歌を踏まえた表現である。(解答欄Ⅱタテ14センチ×ヨコ4センチ)

〈第三講〉

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

ある夜、雪いたう降りて、表の人音ふけゆくままに、衾ふすま引きかづきて臥したり。あかつき近うなつて、障子ひそまりあけ、盗人の入り来る。娘おどろいて、「助けよや人々。よや、よや」とうち泣く。野披やば起き上がりて、盗人に向かひ、「わが庵いはは青氈せいせんだもなし。されど、飯めし一釜、よき茶一斤きんは持ち得たり。柴折しばりくべ、暖まりて、人の知らざるを宝にかへ、明け方を得たでいなば、我にも罪なかるべし」と、談話常のごとくなれば、盗人もうちやはらいで、「まことに表より見つるとは、貧福、金と瓦かまどのごとし。さらばもてなしにあづからん」と、覆面かくめんのまま並びゐて、数々の物語す。中に年老いたる盗人、机の上をかきさがし、句の書けるものをうち広げたるに、

草庵の急火をのがれ出でて

わが庵の桜もわびし煙けむりりさき

野披

といふ句を見つけ、「この火いつのことぞや」。野披がいはい、「しかじかのころなり」。盗人手を打ちて、「御坊にこの発句させたるくせものは、近きころ刑せられし。火につけ水につけ発句して遊び給たまはば、今宵こよひのあらましも句にならん。願はくは今聞かん」。野披がいはい、「苦樂をなぐさむを風人といふ。今宵のこと、ことにをかし。されどありのままに句に作らば、我は盗人の中宿なり。ただ何ごとも知らぬなめり」と、かくいふことを書いて与ふ。

垣かきくぐるを雀すずめならなく雪のあと

(『芭蕉翁頭陀物語』)

〔注〕○野披——芭蕉の門人の志太野披。

○青氈——家の宝物。

○一斤——「斤」はお茶などの重量の単位。

設問

(一) 傍線部(ア)・(イ)・(ウ)・(エ)を、わかりやすく現代語訳せよ。

(二) 「ありのままに句に作らば、我は盗人の中宿なり」(傍線部(オ))とあるが、野披はどういうことを心配しているのか、説明せよ。

(解答欄…一三・六センチ×一行)

(三) 傍線部(カ)は何をぼかして言ったものか、簡潔に答えよ。

(解答欄…六・八センチ×一行)

〈第四講〉

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

右大将道綱の母

嘆きつつひとり寝る夜をあくる間はいかに久しきものとかは知る

『拾遺集』恋四、「入道摂政まかりたりけるに、門をおそく開けければ、立ちわづらひぬと言ひ入れて侍りければ、詠みて出だしける」とあり。今宵もやとわびながら、独りうち寝る夜な夜なの明けゆくほどは、いかばかり久しきものとか知り給へる、となり。門開くる間をだに、しかのたまふ御心にひきあてておぼしやり給へと、このごろ夜がれがちな下の恨みを、ことのついでにうち出でたるなり。『蜻蛉日記』に、この門たたき給へることを、つひに開けずして帰しまゐらせて、明くるあした、こなたより詠みてつかはせしやうに書けるは、ひがごとなり。

「ひとり寝る夜をあくる間は」といひ、「いかに久しき」といへるは、門開くるあひだのおそきを、わび給ひしにくらべたるなり。つひに開けずしてやみたらんには、何にあたりてか、「あくる間は」とも、「久しき」とも詠み出づべき。

（『百首異見』）

〔注〕○入道摂政——巖原兼家（九二九〜九九〇）。道綱の母の夫。

○『蜻蛉日記』——道綱の母の日記。

設問

(一) 門開くる間をだに、しかのたまふ」〈傍線部(ア)を、「しか」の内容が明らかになるように現代語訳せよ。

(二) 「このごろ……うち出でたるなり」(傍線部(イ))とはどういうことか、簡潔に説明せよ。

(解答欄…一三・ハセンチ×一行)

(三) 『ひとり寝る夜のある間は』といひ……くらべたるなり」(傍線部(ウ))とあるが、この解釈にしたがって、「嘆

きつつ……」の歌を現代語訳せよ。

〈第五講〉

次の文章は『源氏物語』みおつくし漣標卷の一節である。須磨、明石に流離していた光源氏は、帰京後、内大臣に昇進した。一方、明石で源氏が出会った明石の君は、かの地で姫君を出産した。都でその知らせを受けた源氏は、かつて娘が后になるといふ予言があつたことを思い出した。これを読んで、後の問いに答えなさい。

(光源氏は)五月五日にぞ、五十日いにはあたるらむと、人知れず数へたまひて、ゆかしうあはれに思しやる。「何ごとも、いかにかひあるさまにもてなし、うれしからまし。口惜しのわざや。さる所にしも、こ心苦しきさまにて出で来たるよ」と思す。男君ならましかばかうしも御心にかけてたまふまじきを、かたじけなういとほしう、わが御宿世も、この御事に付けてぞかたほなりけりと思さるる。御使出だし立てたまふ。「かならずその日違へずまかり着け」とのたまへば、五日に行き着きぬ。思しやることもありがたうめでたきさまにて、ままめまめしき御とぶらひもあり。

(源氏)「海松うみまつや時ぞともなきかげにゐて何のあやめもいかにわくらむ

心のあくがるるまでなむ。なほかくてはえ過ぐすまじきを、思ひたちたまひね。さりともうしろめたきことは、よも」と書いたまへり。入道、例の、喜び泣きしてゐたり。かかるをりは、生けるかひもつくり出でたる、ことわりなりと見ゆ。

ここにも、よろづところせきまで思ひ設けたりけれど、この御使なくは、闇の夜にてこそ暮れぬべかりけれ。乳母めのとも、この女君のあはれに思ふやうなるを語らひ人にて、世の慰めにしけり。をさをさ劣らぬ人も、類にふれて迎へ取りてあらすれど、こよなく衰へたる宮仕人などの、いは巖の中尋ぬるが落ちとまれるなどこそあれ、これはこよなうこめき思ひあがり。聞きどころある世の物語などして、大臣の君の御ありさま、世にかしづかれたまへる御おぼえのほども、女心地にまかせて限りなく語り尽くせば、(明石の君は)げにかく思し出づばかりのなごりとどめたる身も、まいとたけくやうやう思ひなりけり。御文ももるともに見て、心の中に、(乳母は)「ああはれ、かうこそ思ひの外にめでたき宿世はありけれ。うきものはわが身こそありけれ」と思ひつづけらるれど、「乳母のことはいかに」などこまかにとぶらはせたまへるもか

たじけなく、何ごとも慰めけり。

御返りには、

(明石の君)「数ならぬみ島がくれに鳴く鶴たつを今日もいかにととふ人ぞなき

よろぶに思うたまへむすぼほるるありさまを、かくたまさかの御慰めにかけてはべる命のほどもはかなくなむ。げにうしろやすく思うたまへおくわざもがな」と、まめやかに聞こえたり。

(注)○五十日——生後五十日の祝い。○かたほ——不十分なこと。ここでは、源氏の流離をさす。○海松——海草の一種。「みる」ともいう。

○思ひたち——上京を決心すること。○入道——明石の君の父。○かひ——「かひ(効)」に「かひをつくる(べそをかく)」を掛けた。

○乳母——姫君誕生の折、源氏が明石へ遣わした。もと宰相の娘であったが、両親を亡くして零落し、最近子を産んだ。○類——縁故。

○巖の中尋ぬる——「いかならむ巖の中に住まばかは世の憂きことの聞こえござらむ」(『古今集』)により、隠遁いんとんや出家を考えた人、の意。

○こめき思ひあがり——上品で誇り高い。○大臣の君——源氏。

問一 傍線部(ア)・(イ)・(エ)を現代語訳しなさい。

問二 傍線部(ウ)「ぬ」と同じ助動詞「ぬ」を含む文節を、(ウ)より前の箇所からすべて抜き出しなさい。

問三 傍線部(オ)「あはれく慰めけり」に見える乳母の心の動きについて五〇字以内にまとめなさい。(句読点も一字とする)

問四 この文章中で、姫君をさしている表現をすべて抜き出しなさい。

次の文を読んで、あとの間に答えよ。(五〇点)

神の社にまれ、御陵にまれ、歌枕にまれ、何にまれ、はるかなる古へのを、中頃とめ失ひたるを、今の世にしてたづね定めむことは、おほかたたやすからぬわざになむありける。そのゆゑをいはむには、まづこの古き所をたづぬるわざは、ただに古への書どもを考へたるのみにては知りがたし。いかにくはしく考へたるも、書もて考へ定めたることは、その所にいたりて見聞けば、いたく違ふことの多きものなり。よそながらはさだかならぬ所も、その国にてはさすがに書きも伝へ語りも伝へて、まがひなきこともあり。さればみづからその地^{とこ}にいたりて、見もし、その事よく知れる人に問ひ聞きなどもせでは、事足らはず。またただ一たび物して見聞きたるのみにては、なほ足らはず。行きて見聞き、立ちかへりて、また書どもと考へ合せて、またまたも行きて、よく見聞きたるうへならでは、定めがたかるべし。さてまたその所の人にあひて問ひ聞くにも、心得べきことくさぐさあり。古への事を、あまりたしかに知り顔に語るは、多くは、書の片はしをなまなまに考へなどしたるもの、おのがさかしらもて定めいふが多ければ、そはいと頼みがたく、なかなかの物損^{ぞこな}ひなり。また世に名高き所などをば、外^{ほか}なるをも、しひておのが国おのが里のにせまほしがるならひにて、ただいささかのよりどころめきたることをも、かたくとらへて、しひてここぞといひなして、しるしを作るたぐひなど、はた世に多きを、さる心してまどふべからず。書などはむげに見たることなき、ひたぶるの賤^{しづ}の男^をの、おぼえゐて語ることは、尻口^{しりぐち}合はず、しどけなく、ひがことのみ多かれと、その中にはかへりてをかしき事もまじるわざなれば、さるたぐひをも心とどめて聞くべきわざなり。されどまた、昔なまなまの物知り人などの尋ね来たるが、ひが定めして、ここはしかじかの跡ぞなど教へおきたるを聞きをりて、里人はまことにさることと信じて、子孫^{こゝろ}などにも語り伝へたるたぐひもあんなれば、うべうべしく聞こゆることも、なほひたぶるにはうけがたし。またみづからその所のさまを行き見て定むるにも、くさぐ

さ心得べき事どもあり。おほかた所のさま神さびて、木立しげく、もの古り^ふなどしたるを見れば、^③こここそはと目とま
るものなれど、それはたうちつけには頼みがたし。おほかた何ならぬ所にも、古めきたる森林^{もりはやし}などは多くあるものなり。
木立など二三百年をも経ぬるは、いともの古りて見ゆるものなれば、古く見ゆるにつきても、たやすくは定めがたき
わざなりかし。

(『玉勝問』六)

問一 傍線部(1)～(3)を現代語訳せよ。(解答欄Ⅱ(1)タテ14センチ×ヨコ4センチ、(2)(3)タテ14センチ×ヨコ3
センチ)

問二 古書に記載された名所旧跡の場所を確定するためには、現地へ行って調査し、その土地の人の話も聞かなければな
らないと、筆者はいう。しかし、土地の人の話だからといってそのまま信用してしまうのはよくないということをも、
いろいろな事例に即して述べている。それらの事例をすべて挙げて、筆者のいうところを説明せよ。(解答欄Ⅱタテ
14センチ×ヨコ13センチ)

問三 次に筆者は、自分で実地調査をする場合にもいろいろ気をつけなければならないことがあるとして、具体的な事例
を一つ挙げている。それはどのようなことか、説明せよ。(解答欄Ⅱタテ14センチ×ヨコ3センチ)

〈第七講〉

次の文を読んで、あとの間に答えよ。(五〇点)

花は生くるも投げ入るるも、おのおのその法ありとぞいふめる。されど片田舎なる人は知らず。知らずとて花のめでたからぬかは。軒に半ば垢つきたる花桶のかたくななるを、心ぼそくも糸にかけて、(1)花の多かる多からぬは童山賤の手にまかせつつ、捨てやらす取りつくるはず、つかみ押せば、おのがまにまに乱れあひて、仰ぐべきは垂れ、低かるべきは高く、思ふままならぬも、(A)人の世にならずらへてをかし。(2)花の名残りはさらなり。枝あぢきなく枯れ、葉あはれに衰へぬるが、興深ければ、いつもささがにの蜘蛛の住みかとなるまで換へやらで、(3)旧きに新たなるを重ぬれば、よそ目さぞいぶせからん。隣りなる亀てふ童の、此のころ桜惜しげなく折りきて、元てふ子に挿させたるが、風にさそはれ、文のはし硯の面に散りかかりて、人の心をなやませしも、いつか昨日の昔にて、(4)あとは若葉の、わづかなる水を命とも知らず、緑を添へ、花しべ艶に残れり。行く春のかたみと思へば、いかで捨てやはやるべき。蝶や蜂の来なれて、たづね迷ふも心苦しく、椿しやがやうのもの折り添へぬれば、かれも所得顔に遊びたはむれつつ、「万物静かに観れば皆自得」と言ふことなど思ひ出でて、口ずさみけり。かの枝をわがね、葉をすかし、花房を摘み、色うつろへばやがて情けなくかいやり捨つるを口惜しとは、(B)われひとりとして思ふことにや。

(三)浦梅園『梅園拾葉』

(注)〇亀・元——筆者の周囲にいる子供の名。

〇しやが——植物の名。晩春、あやめに似た白い小形の花を開く。

〇万物静かに観れば皆自得——宋の儒者、程明道の詩の一節。この世のあらゆる物事を静かに眺めてみると、皆それぞれ、それなりのあり方であるかに存在している、の意。

〇わがね——曲げ、たわめ。

問一 傍線部(1)～(4)について、単なる現代語訳ではなく、どういうことをいっているのか、分かりやすく説明せよ。

(解答欄Ⅱ各々タテ13センチ×ヨコ2.5センチ)

問二 傍線部(A)について、何がどのように「をかし」なのか、分かりやすく説明せよ。(解答欄Ⅱタテ14センチ×ヨコ4センチ、問三も同様)

問三 傍線部(B)について、何をどのように思うのか、分かりやすく説明せよ。

〈第八講〉

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

十二年の合戦に、貞任はうたれにけり。宗任は降人になりて来たりければ、優してつかひけり。嫡男義家朝臣のもとに朝夕祇候しけり。

ある日、義家朝臣、宗任一人を具してもものへ行きけり。主従ともに狩装束にて、うつぼをぞ負へりける。ひろき野を過ぐるに狐一匹走りけり。義家、うつぼより雁股をぬきて、狐をかけけり。射殺さんはむざんなりと思ひて、左右の耳の間をすりざまに、しりへ射たりければ、矢は狐の前の土にたちにけり。狐その矢にふせがれて、たふれてやがて死ににけり。宗任、馬より下りて、狐を引きあげて見るに、「矢もたたぬに死にたる」といひければ、義家見て、「臆して死にたるなり。殺さじとてこそ射はあてね、いま生き帰りなん。その時はなつべし」といひけり。則ち矢を取りて参らせければ、やがて宗任して、うつぼに「ささせ給ひけり。他の郎党これを見て、「あぶなくもおはするものかな。降人に参りたりとも、本の意趣は残りたるらんものを。脇をそらして矢をささする事、あぶなき事なり。おもひきる害心もあらば、いかに」とぞかたぶきける。されども義家は殆ど神に通じたる人なりけり。宗任いかにも思ひよるべくもなかりければ、たがひにかく身をまかせけるにや。

ある夜、また宗任ばかりを具して女のもとへ行きたりけり。家ふるくなりて、築地くづれ、門もかたぶけり。車寄せの妻戸をあけて、その内にてあひたりけり。宗任は中門に侍りけり。五月闇の空、墨をかけたるごとくにて、雨降り神なりて、おそろしき事限りなし。いかにも今夜、事あらんざらんと思ひたる所に、案のごとく強盗数十人きほひ来にけり。門の前によりそひてあり。火をともしたる影より見れば、三十人ばかりあり。宗任、いかがはからふべきと思ひあたるに、中門の下より犬一匹走り出でて、ほえけるを、宗任、小さき引目をもて射たりけるに、犬射られて、けいけいとなき

て走るを、やがておなじさまに矢つぎばやに射てけり。その時、義家朝臣「誰候ふぞ」と問ひたりければ、「宗任」と名乗りたり。「^A矢つぎのはやさこそはしたなけれ」といはれけり。強盗ども、このことばを聞きて、「八幡殿のおはしましけるぞ。あなかなし」とて、はふはふ逃げ失せにけるとなむ。

(『古今著聞集』による)

(注)〇十二年の合戦——鎮守府將軍源頼義、その嫡男八幡太郎義家らの追討軍と、安倍貞任・宗任兄弟らの反乱軍が陸奥で十二年間戦った前九年の役。

〇雁股——先端が二股に分かれた殺傷力の強いやじり鏃のついた矢。

〇引目——木で作られ、中が空洞、数個の穴があけられ、空中を飛ぶとき音を発する鏃のついた矢。

問一 傍線部(ア)～(エ)を解釈しなさい。

問二 次の例を参考にして、二重傍線部(a)を品詞分解しなさい。

《例》 死ナ変動詞・連用に たる完了助動詞・連体 なり断定助動詞・終止

問三 波線部(A)について、義家は宗任の「矢つぎのはやさ」をどのようにして知ったか、説明しなさい。

問四 この説話に語られる義家の人柄をあらわす適当な二字熟語を、二つ左記の空欄に書きなさい。

□	□
□	□

〈第九講〉

次の文章を読んで、問いに答えよ。

今は昔、(注) 赤染衛門といふ歌よみは、時用といひけるが娘、(注) 入道殿に候ひけるが、心ならず(注) 匡衡を男にして、いと若き博士にてありけるを、事に触れて、(注) のがひいとひ、あはじとしけれど、男はあやにくに心ざし深くなりゆく。殿の御供に、(注) 住吉へ参りて、詠みおこせたる、

(注) 恋しきに難波のこともおほほえずたれ住吉のまつといひけむ
返事、(注) 名を聞くに長居しぬべき住吉のまつとはとまる人やいひけむ

逢ふ事の有りがたかりければ、思ひわびて、(注) 稲荷の神主の娘の許へ通ひなどしけれど、心にも入らざりけり。

匡衡、(注) 尾張の守などになりければ、(注) 猛になりて、(注) えいとひもはてず、(注) 挙周など生みてければ、(注) 幸人といはれけり。尾張へ具して下る道にて、守りひとりごつ、

疾う彼の国に(注) いたりてしがな

赤染、

みやこ出でて今日九日になりけり

挙周、(注) 望む事有りけるに、(注) 申文の奥に書きて、(注) 鷹司殿へ参らせたる、思へ君頭の雪を払ひつつ消えぬ先にと急ぐ心を

入道殿、御覽じて、^(ウ)いみじくあはれがらせ給ひて、和泉いづみの守には、急ぎなさせ給ひたりけるとぞ。和泉へ下る道にて、
挙周、例ならず大事にて、限りになりたりければ、

代はらむと思ふ命は惜しからでさても別れむほどぞ悲しき

^(エ)頼みては久しくなりぬ住吉のまつこのたびのしるし見せなむ

と書きて、住吉に参らせたりけるままに、挙周、心地さわさわと止やみにけり。その後、めでたき事に、^(五)世に言ひのし
りけり。

(『古本説話集』による)

(注)○赤染衛門——平安時代の歌人、道長の妻倫子に仕えた。○入道殿——藤原道長。

○匡衡——大江匡衡。平安時代の漢文学者。大学の文章博士になった。○のがひ——嫌って遠ざけること。

○住吉——住吉神社。○猛になりて——富裕な勢力家になったこと。○鷹司殿——倫子。

問1 傍線部(ア)～(エ)を口語訳せよ。

問2 波線部(a)の歌を詠んだのは誰か。文中から人名を抜き出して答えよ。

問3 波線部(b)について、挙周は何を望んだのか、わかりやすく答えよ。

問4 波線部(c)の歌には、赤染衛門のどのような願いがこめられているか。

〈第十講〉

次の文章は、『源氏物語』の帚木卷の一節で、中将なる人物が、かつて自分がうかつだったために失踪してしまった女性のことを回想して語るくだりである。これを読んで、後の問いに答えなさい。

中将、「なにがしは、痴者の物語をせむ」とて、「いとしのびて見そめたりし人の、^(註)さても見つべかりしけはひなりしかば、^(註)ながらふべきものとも思う^(註)たまへざりしかど、馴れゆくままにあはれとおぼえしかば、たえだえ忘れぬものに思うたまへしを、さばかりになれば、うち頼めるけしきも見えき。^(註)頼むにつけては、うらめしと思ふこともあらむと、心ながらおぼゆるをりもはべりしを、見知らぬやうにて、久しきとだえをも、かうたまさかなる人とも思ひたらず、ただ^(註)朝夕にもてつけたらむありさまに見えて心苦しかりしかば、^(註)頼めわたることなどもありきかし。親もなく、いと心細げにて、さらばこの人こそはと、ことにふれて思へるさまもらうたげなりき。かうのどけきにおだしくて、久しくまからざりしころ、^(註)この見たまふるわたりより、なさけなくうたてあることをなむ、さるたよりありて、かすめ言はせたりける、後にこそ聞きはべりしか。さる憂きことやあらむとも知らず、心には忘れずながら、消息などもせで久しくはべりしに、むげに思ひしをれて、心細かりければ、をさなき者などもありしに、思ひわづらひて、撫子の花を折りておこせたりし」とて涙ぐみたり。(光源氏)「さて、その文のことばは」と問ひたまへば、「いさや、ことなることもなかりきや。

(女)山がつの垣ほ荒るともをりをりにあはれはかけよ^(註)撫子の露

思ひいでしままにまかりたりしかば、例のうらもなきものから、いともの思ひ顔にて、荒れたる家の露しげきをながめて、虫の音にきほへるけしき、昔物語めきておぼえはべりし。

(中将)咲きまじる色はいづれとわかねどもなほ常夏にしくものぞなき

大和撫子をばさしおきて、まづ^(註)塵をだになど、^(註)親の心をとる。

(女) (モ)うち払ふ袖も露けき常夏にあらし吹きそふ秋も来にけり

と、はかなげに言ひなして、まめまめしく恨みたるさまも見えず、涙をもらしおとしても、いとほづかしくつつましげにまぎらはし隠して、つらきをも思ひ知りけりと見えむは、わりなく苦しきものと思ひたりしかば、心やすくて、またどだえ置きはべりしほどに、あともなくこそかき消ちて失せにしか。……」

(注)○さても見つべかりしけはひ——そのように人目を忍ぶ仲のままにしておいてもよさそうな女の様子。○ながらふべきもの——長続きしそうな仲。

○朝夕にもてつけたらむありさま——朝夕世話しなれた夫に対するようなふるまいかた。○この見たまふるわたり——自分の正妻。

○塵をだに——「塵をだにすゑじとぞ思ふ咲しより妹(いも)とわが寝(ぬ)る常夏の花」(『古今和歌集』卷三・夏歌・凡河内躬恒(おほしこうちのみつね))をふまえている。なお、「常夏」は撫子の別名。

問一 傍線部(ア)の「たまへ」の、活用の種類(何段活用か)と文法的意味を記しなさい。

問二 傍線部(a)・(b)二つの「頼む」について、活用の種類(何段活用か)と意味の違いを記しなさい。

問三 傍線部(イ)は、何をたとえているか。文中の言葉で記しなさい。

問四 傍線部(ウ)はどういうことか。説明しなさい。

問五 傍線部(エ)の歌に用いられている懸詞を抜き出して説明しなさい。

問六 中将は、かつて自分がこの女性に対してとった態度のどのような点を「痴者」と言っているのか。この女性がどのような性格で、それに対して中将はどのような態度をとっていたのか、この二点がわかるように、一〇〇字以内で記しな

504

〈第十一講〉

次に記す人物などの説明、及び系図を参照しつつ、問題文を読んで、あとの問に答えよ。(五〇点)

四条大納言(殿・大納言殿)——藤原公任。

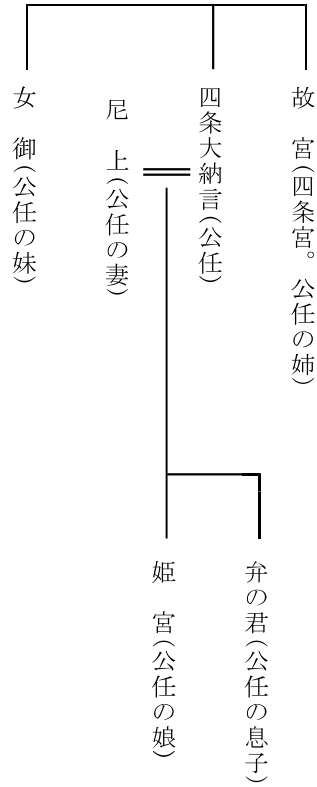
女御——公任の妹。

尼上(上)——公任の妻。

姫宮(中姫君・この君・この宮・姫君)——公任の娘。故宮の養女で、宮亡き後は公任の許にあつた。

弁の君——公任の息子。姫宮の兄。

小二条殿——尼上の住居。



四条大納言殿には、女御・尼上・姫宮など、天王寺へ、二月に詣で給ふ。忍びてとおぼし掟てためれど、事限りあれば皆洩り聞えぬ。さて三日ばかり候はせ給ひて、さべき事ども仏にも仕うまつらせ給ひ、僧にも物賜はせなどして、帰らせ給ひぬ。姫宮と聞ゆるは、この四条大納言の中姫君を、故宮の御子にし奉らせ給へりしなり。道よりあやしく悩ましげにおはしますとて、殿も上も、しづ心なくおぼし乱れたり。なほあだなる御心地とこそおぼしめししか、まことに苦し

うて、頼もしげなく見えさせ給ふにも、⁽¹⁾故宮のいみじきものに思ひきこえ給へりしものを、いかにとのみ⁽²⁾よろづにし
尽させ給へど、三月廿余日の程にうせさせ給ひぬ。大納言殿も尼上も、⁽³⁾おろかにおぼさむやは。いみじうおぼし歎きた
り。弁の君も折しも御嶽^{みたけ}に詣り^{まゐ}給ひにしかば、さまざまあはれにおぼし歎きて、⁽⁴⁾さりとてやはとて、後の御事どももの
しきこえ給ふ。いみじうあはれなり。

⁽³⁾四条の宮のよろづの御宝、ただこの君に譲りきこえ給へりしも、この後の御事どもに、ことさらにおぼし⁽⁴⁾掎^ひてけり。
北の対に殿は住ませ給ふ。寝殿に女御殿とこの宮とは住ませ給ふなりけり、大納言の御前に⁽⁵⁾撫子^{なでしこ}をいと多く植ゑさせ給へ
るが、枯れたるを御覧じて、大納言、

露をだにあてじと思ひて朝夕に我がなでしこの枯れにけるかな

天王寺にて姫君のけづらせ給ひし御髪^{みぐし}の、物の中より出で来たるをみ給ひて、尼上、

(A)あだにかく落つと歎きしむば玉の髪^{かみ}こそ長きかたみなりけれ

(中略)

四条大納言殿には、あはれなる御事どもを尽きせずおぼさる。かの姫君の御数珠^{かずず}のありけるを、おはしける折りに失は
せ給へりけるが、物の中より出で来たりけるを、女御殿より小二条殿に、尼上の御許に奉れ給ふとて、

しるしくも見えぬなりけり数しらず落つる涙の玉にまがひて

尼上御返し、

(B)別れにし人に代へても見てしがな程経てかへるたまもありけり
など、いとあはれなる事多くなん。

(『栄花物語』)

(注)○あだなる御心地——ほんの一时的なご病気。

問一 傍線部(1)・(3)を現代語訳せよ。

問二 傍線部(イ)・(ロ)の内容を、それぞれ言葉を補って説明せよ。(解答欄Ⅱ(イ)・(ロ)とも13センチ×2センチ)

問三 尼上の歌(A)・(B)を解釈せよ。(解答欄Ⅱ(A)・(B)とも13センチ×3.5センチ)

次の文章は、『今鏡』「藤波の上」の一節である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

大殿おほとの伏見へおはしましたりけるも、すずるなる所へはおはしますまじきに、雪の降りたりけるつとめて、「俊綱がいたく伏見ふけらかすに、にはかに行きて見む」とて、播磨守もろのぶ師信といふ人ばかり御供ごともにて、にはかにわたらせ給ひたりければ、思ひ寄らぬことにて、修理すりの大夫かみ騒さわぎ出いでて、雪御覧ゆきごらんじ、御物語ごものがたりなどせさせ給ふほどに、師信、「かくわたらせ給ひたるに、（さ）とく、しかるべきあるじなどつかうまつれ」などもよほしければ、俊綱、「いま贅殿へいどの参り侍りなむ」と申しければ、「人にも知られでわたらせ給ひたれば、贅殿へいどの参ることあるまじ。日もやうやうた闌たけて、いかでか御設ごまうけなくてあらむ」といひければ、殿との笑はせ給ひて、「ただ責めよ」など仰せられけるほどに、家の司つかさなるあきまさといひて、光俊、有重ありしげなどいふ学生がくしやうの親おやなりし男、気色けしききこえければ、修理すりの大夫立ち出でて、帰り参りて、「あるじしてきこしめすべきやう侍らざなり。御台みだいなどの新しきも、かく御覧ごらんずる山のあなたに、倉くらに置き籠こめて侍れば、便びんなく、（さ）取り出づべきやう侍らず。あらはに侍るは皆人の用ゐたる」由よし申しければ、「何の憚はばかりかあらむ。ただ取り出だせ」と仰せられければ、「さは」とて立ち出でて、取り出ださせけるに、色々の狩装束かりさうぞくしたる伏見侍十人、色々の相あひめに、いひ知らぬ染めまぜしたる帷子かたびら、括くくり、掛かけ綴とちなどしたる雑仕ざつかし十人引き連れて、倉くらの鍵持かぎちたる男、先に立ちてわたるほど、雪に映はえて、（さ）わざとかねてしたるやうなりけり。先に跡踏しりみつけたるを、後しりに続きたる男女、同じ跡を踏みて行きけり。帰かへさには、御台たかつき、高坏しろがね、銀てうしの銚てうし子なごなど一つづつ捧たげて、鍵持かぎちたるはこの度は後に立ちて帰りぬ。かかるほどに、上達部かんだちめ、殿上人、藏人所けいしの家司しきじ、職事しきじ、御隨身みずいじんなど、さまざまに参り込みたりけるに、このさかのさ、所々にいひ知らぬ供そなへども目もあやなりけり。師信、「（さ）いかにかくは、にはかにせられ侍るぞ。かねて夢など見侍りけるか」とたはぶれ申しければ、俊綱の君は、「いかでか、かかる山里に、（さ）かやうのこと侍らむ用意なくては侍るべき」などぞ申されける。

〔注〕○大殿——藤原師実。当時最高の地位にあった。○俊綱——師実と兄弟だが、他家の人間になっていた。

○伏見ふけらかすに——伏見の自邸を自慢するので。○修理の大夫——俊綱をさす。○贄殿——師実家の調理人。
○家の司——俊綱家の家政を司る責任者。○御台——食器をのせる台。○山——庭の築山。○裯——表着の下に着る衣服。
○染めませしたる帷子——種々の染め糸をませて織った布地で作ったひとえの衣服。○括り——絞り染め。○掛け綴ぢ——刺繡ししゅうの一種。
○雑仕——雑仕女。雑役に従事する女。○蔵人所の家司——師実家の蔵人所の責任者。○職事——家司の下の職員。
○参り込みたりけるに——大殿の後を追って参集していたが。○このさかのさ——こちらやあちら。

問一 傍線部(A)「とく、しかるべきあるじなどつかうまつれ」・(B)「わざとかねてしたるやうなりけり」を現代語訳せよ。

問二 傍線部(ア)「笑はせ給ひて、『ただ責めよ』など仰せられける」の言動には二つの気持ちが同時に表れている。その気持ちをそれぞれ五字以内の語句で記しなさい。

問三 傍線部(イ)「いかにかくは、にはかにせられ侍るぞ。かねて夢など見侍りけるか」の発言には二つの気持ちが込められている。その気持ちをそれぞれ五字以内の語句で記しなさい。

問四 傍線部(a)は、俊綱はどういうことを憚って、倉から「取り出づべきやう侍らず」と言ったのか。主な理由を二つ書きなさい。

問五 傍線部(b)「かやうのこと」とは、具体的にはどういうことか。一〇字以内で記しなさい。

〈予備問題〉

□ 次の文を読んで、後の問いに答えよ。(五〇点)

永観律師といふ人ありけり。年ごろ念仏の志深く、名利を思はず、世捨てたるが如くなりけれど、さすがに、あはれにも、つかまつり知れる人を忘れざりければ、（一）ことさら深山を求むることもなかりけり。東山禅林寺といふところに籠居しつづ、人に物を貸してなむ、日をおくるはかり事にしける。借る時も返す時も、ただ来たる人の心にまかせて沙汰しければ、（二）なかなか仏の物をとていささかも不法のことはせざりけり。いたくまづしき者を返さぬおぼ、前に呼び寄せて、物のほどにしたがひて念仏を申させてぞ（三）あがはせける。

東大寺の（四）別当のあきたりけるに、白河院、この人をなし給ふ。聞く人、耳を驚かして、「（五）よも受け取らじ」といふほどに、（六）思はずに、いなび申すことなかりけり。

その時、年ごろの弟子、つかはれし人など、我も我もとあらそひて、東大寺の莊園を望みにけれども、一所も（七）人のかへりみにもせずして、みな寺の修理の用途に寄せられたりける。みづから本寺に行き向かふ時には、（八）異様なる馬に乗つて、（九）かしこにいるべきほどの時料、小法師に持たせてぞ入りける。

かくしつづ、三年のうちに修理事ははりて、すなはち辞し申す。（十）君、またとかくの仰せもなくて、異人をなされにけり。よくよく人の心を合はせたるしわざのやうなりければ、時の人は、「（十一）寺の破れたることを、この人ならでは、心やすく沙汰すべき人もなし、と思しめして仰せ付けけるを、律師も心得給ひたりけるなむめり」とぞいひける。深く罪を恐れけるゆゑに、年ごろ寺の事おこなひけれど、寺物をつゆばかりも自用のことなくてやみにけり。

（『発心集』）

（注）○あがはせける——つくなわせた。

○別当——東大寺などの大寺院の最上位にあつて、寺務を総裁する僧。

○人のかへりみ——特定の人に対する援助

問一 傍線部(1)～(5)を現代語に訳せ。省略されている言葉があるとされる箇所は、適宜補って訳せ。

問二 傍線部(A)について、「聞く人」はなぜこのように言ったのか、説明せよ。(解答欄 14センチ×3センチ)

問三 傍線部(B)の「時の人」の言葉はどういうことを言っているのか、傍線部(5)に述べられていることをも考えに入れて、説明せよ。(解答欄 14センチ×8センチ)

□ 次の文章は、京都の六波羅勢が笠置の官軍を攻める、『太平記』中のある場面である。これを読んで、あとの問いに答えよ。

さるほどに、主上笠置に御座有つて、近国の官軍付き従ひ奉る由、京都へ聞こえければ、山門の大衆又力を得て、六波羅へ寄することもや、有らんずらんとて、佐々木判官時信に、近江一国の勢を相副へて、大津へ向けらる。これもなほ小勢にて叶ふまじき由を申しければ、重ねて丹波国の住人、久下・長沢の一族らを差し副へて、八百余騎、大津東西の宿に陣を取る。

九月一日、六波羅の両検断、糟谷三郎宗秋・隅田次郎左衛門、五百余騎にて宇治の平等院へ打ち出で、軍勢の着到を付くるに、催促をも待たず、諸国の軍勢、夜昼引きも切らず馳せ集まつて、十万余騎に及べり。既に明日二日巳の刻に押し寄せて、矢合はせ有るべしと定めたりけるその前の日、高橋又四郎抜け駆けして、独り高名に備へんと思ひけん、わづかに一族の勢三百余騎を率して、笠置の麓へぞ寄せたりける。城に籠もるところの官軍は、さまで大勢ならずといへども、勇氣未だ緩まず、天下の機を呑んで回天の力を出ださんと思へる者どもなれば、わづかの小勢を見て、なじかは打つて懸からざらん。その勢三千余騎、木津川の辺に下り合うて、高橋が勢を取り籠めて、一人も余さじと攻め戦ふ。高橋、始めの勢ひにも似ず、敵の大勢を見て、一返しも返さず、捨て鞭を打つて引きけるあひだ、木津川の逆巻く水に追ひ浸され、討たる者その数若干なり。わづかに命ばかりを助かる者も、馬・物の具を捨てて赤裸になり、白昼に京都へ逃げ上る。見苦しかりし有り様なり。

これを悪しと思ふ者やしたりけん、平等院の橋詰に一首の歌を書いてぞ立てたりける。

① 木津川の瀬々の岩波早ければかけて程なく落つる高橋

高橋が抜け駆けを聞いて、引かば入り替はつて高名せんと、後に続きたる小早川も、一度に皆追つ立てられ、一返しも返さず宇治まで引いたり聞こえければ、又札を立て副へて、

(D) かけも得ぬ高橋落ちて行く水にうき名を流す小早川かな

問1 傍線部(A)く(才)の語句の意味を記せ。

問2 傍線部(A)の箇所を、次の例にならつて、文法的に説明せよ。

(例)

八行四段活用動詞

「叶ふ」の終止形

叶
ふ

打消し推量の助動詞

「まじ」の連体形

ま
じ
き

問3 傍線部(B)を解釈せよ。

問4 本文中の二首の歌は、「落首」といわれるものである。

(I) 傍線部(C)の歌を解釈せよ。

(II) 「落首」としての面白さを、傍線部(D)の歌に即して説明せよ。

〔三〕 次の「A」「B」「C」三つの文章は、『堤中納言物語』「ほどほどの懸想」の一節である。それぞれ少年と少女、侍者と女房、貴公子(頭中将)と姫君の恋模様を描いている。少年と侍者は頭中将に、少女と女房は姫君に仕えている。これを読んで、後の問いに答えなさい。

〔A〕(葵祭の華やいだ雰囲気の中、一組の少年少女が出会い、歌を詠み交わす)

(女ノ童ガ)あまた見ゆる中に、いづくのにかあ(ら)む、薄色着たる、髪はたけばかりある、かしらつき、やうだい、何もいとをかしげなるを、頭中将の御小舎人童、思ふさまなりとて、いみじうなりたる梅の枝に、葵をかざして取らすとて、

梅が枝にふかくぞたのむおしなべてかざす葵のねも見てしがな

と言へば、

しめのなかの葵にかかるゆふかづらくれどねながきものと知らなむ

と、おし放ちていらふも、戯れたり。「あな、聞きにくや」とて、笏して走り打ちたれば、「そよ、そのなげきの森のもどかしければぞかし」など、ほどほどにつけては、かたみに「いたし」など思ふべかめり。その後、つねに行き逢ひつとも語らふ。

〔B〕(童たちの恋が成つて、その後しばらくして)

君の御方に若くてさぶらふ男、このましきにやあらむ、定めたるところもなく、この童に言ふ。「その、通ふらむところはいづくぞ。さりぬべからむや」と言へば、「八条の宮になむ。知りたる者さぶらふめれども、ことに若人あまたさぶらふまじ。ただ、中将、侍従の君などいふなむ、かたちもよげなりと聞きはべる」と言ふ。「さらば、そのしるべして伝へさせよ」とて、文取らすれば、「はかなの御懸想かな」と言ひて、持て行きて取らすれば、「あやしのことや」と言ひて、持てのぼりて、「しかじかの人」とて見す。

「C」(女房の返事が侍者に届く。頭中将はそれを見とがめ、旧知の式部卿しきぶきょうのみやけ 宮家からのものと知り、宮家の姫君に関心を深める)童を召して、ありさまくはしく問はせたまふ。ありのままに、心細げなるありさまを語らひきこゆれば、「あはれ、故宮のおはせましかば」。さるべき折はまうでつつ見しにも、よろづ思ひ合はせられたまひて、「世の常に」など、ひとりごたれたまふ。わが御上も、はかなく思ひつづけられたまふ。いとど世もあぢきなくおぼえたまへど、また、「世の常に」(エ)いかなる心のみだれにかあらむ」とのみ、つねにもよほしたまひつつ、歌など詠みて、問はせたまふべし。

(注)○「梅が枝」の歌——えに(枝に、縁)、あふひ(葵、逢ふ日)、ね(根、寝)が掛詞。○しめ——しめ縄。

○くれどねながきもの——くれ(来れ、繰れ)、ね(根、寝)が掛詞で、簡単に寝るわけにはいきません、の意。

○なげきの森——古歌をふまえ、木の笏でぶって嘆かせること、の意。○このましき——浮気っぽい。○さりぬべからむや——いい人がいるか。

○八条の宮——故式部卿の宮家。○しるべ——知り合い。○持てのぼりて——女の童が手紙を女房の所へ持参する。

○「世の常に」——世の無常を詠んだ和歌の一節であろう。○もよほし——恋の思いがもよおす。

問一 傍線部(a)・(b)の「らむ」の違いを、文法的に説明せよ。

問二 傍線部(ア)・(イ)は、それぞれどういうことか。文脈に即して説明せよ。

問三 傍線部(ウ)は小舎人童の言葉だが、この言葉にはどのような気持ちがかめられているか。わかりやすく説明せよ。

問四 傍線部(エ)では、誰が、何と何との葛藤に悩んでいるのか、簡潔に記せ。

が と との葛藤で悩んでいる。

問五 「A」は少年少女の若々しい率直な恋を描くが、これと対比して、「B」・「C」に描かれているのはそれぞれのよう
な恋といえるか。簡潔に記せ。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

入道殿御嶽みたけにまゐらせ給へりし道にて、「帥殿のかたより、便なきことあるべし」と聞こえて、常よりも世をおそれさせ給ひて、たひらかに帰らせ給へるに、かの殿も、「かかること、聞こえたりけり」と人の申せば、いとかたはらいたく思されながら、さりとて、あるべきならねば、まゐり給へり。道ほどの物語などせさせ給ふに、帥殿いたく臆し給へる御気色けしきのしるきを、をかしくもまたさすがに、いとほしくも思されて、「ひさしく双六つまつらで、いとさうざうしきに、けふあそばせ」とて、双六の盤をめして、おし拭ぬぐはせ給ふに、御気色こよなう直りて見え給へば殿をはじめたてまつりて、まゐり給へる人々、あはれになむ見たてまつりける。さばかりのことを聞かせ給はむには、すこしすさまじくもてなさせ給ふべけれど、入道殿は、あくまで情おはします御本性にて、かならず人のさ思ふらんことをばおし返し、なつかしうもてなさせ給ふなり。この御博奕ばくやうは、うちたたせ給ひぬれば、ふたところながら裸に腰からませ給ひて、よなか・あかつきまであそばす。「心幼くおはする人にて、便なきこともこそいで来れ」と、人はうけ申さざりけり。いみじき御賭物どもこそ侍りけれ。帥殿は古きものどもえもいはぬ、入道殿は新しきが興ある、をかしきさまにしなつつぞ、かたみにとりかはさせ給ひけれど、かやうのことさへ、帥殿は常に負けたてまつらせ給ひてぞまかでさせ給ひける。

「大鏡」

(注)入道 藤原道長。

帥殿 藤原伊周。藤原道隆の子で、道長の甥おい。中宮定子の兄。長徳二(九九六)年大宰権帥に左遷されたが、翌年ゆるされて帰京した。

御嶽 大和国吉野の金峯山。藏王権現を祭る。道長の文章中の参詣は、寛弘四(一〇〇七)年のこと。

双六 中国伝来の室内遊戯。賭事に用いられることも少なくなかった。

問一 傍線部 a・b・c の意味を書け。

問二 傍線部 ①・②・③・④・⑤・⑦ を口語訳せよ。

問三 傍線部 ⑤ 「あはれになむ見たてまつりける」のはなぜか。句読点を含め二十字程度で答えよ。

問四 本文から読み取れる道長の性格を簡潔に書け。

問五 傍線部 ⑥ 「さばかりのこと」の具体的内容を、文中の語句を用いて二十五字以内で答えよ。

問六 傍線部 ⑧ 「ふたところながら」を口語訳せよ。

問七 『大鏡』など「鏡」の字が作品名の下につく歴史物語を総称して『鏡物』という。それらのうち『大鏡』以外の作品名を、三つ答えよ。

次の文章は『落窪物語』の一節である。主人公の女君は、実父と継母とともに暮らしているが、その家では、「落窪の君」と呼ばれている。女君には、通ってきている恋人の男君（少将）がおり、この場面でも二人は一緒にいる。女君は翌日の祭を控えて、家族のために裁縫の仕事を押しつけられているところである。これを読んで、後の問いに答えなさい。

暗うなりぬれば、格子おろさせて、燈台に灯をともさせて、「いかで縫ひ出でむ」と思ふほどに、北の方、「縫ふや」と見にみそかにいましにけり。見たまへば、縫物は、うち散らして、灯はともして人もなし。「入り臥しにけり」と思ふに、大きに腹立ちて、「おとどこそ、この落窪の君、こころの愛敬なく見わづらひぬれ、これいましてのたまへ。かくばかり急ぐものを。いづこなりし几帳にかあらむ、持ちしらぬもの設けて、ついたてで、入り臥し入り臥しすることよ」とのたまへば、おとどは、「近くおはしてのたまへ」とのたまへば、いらへ遠くなりぬれば、はての言葉は聞こえず。少将、「落窪の君」とは聞かざりければ、「何の名ぞ、落窪」と言へば、女いみじく恥づかしくて、「いさ」といらふ。「人の名にいかにつけたるぞ。論なう屈したる人の名ならむ。きらきらしからぬ人の名なり。北の方さいなみだちたり。さがなくてぞおはすべき」と言ひ臥したまひけり。

袍裁ちておこせたり。「またおそくもぞ縫ふ」と思して、よろづのこと、おとどに聞えて、「行きてのたまへのたまへ」と責められて、おはして、遣戸を引きあげたまふよりのたまふやう、「いなや、この落窪の君の、あなたにのたまふことに従はず、あしかんなるはなぞ。親なかんめれば、『いかでよろしく思はれにしがな』とこそ、思はめ。かばかり急ぐに、外の物を縫ひて、ここの物に手触れざらむや、何の心ぞ」とて、「夜のうち

に、縫ひ出さずは、子とも見えじ」とのたまへば、女いらへもせで、つぶつぶと泣きぬ。おとど、さ言ひかけて
帰りたまひぬ。人の聞くに恥かしく、「恥の限り言はれ、言ひつる名を我と聞か（き）れぬること」と思ふに、「（ま）た
だ今死ぬるものにもがな」と縫物はしばしおしやりて、灯の暗きかたに向きて、いみじう泣けば、少将あはれに
ことわりにて、「いかに、げに恥かしく思ふらむ」と、我もうち泣きて、「しばし入りて臥したまへ（を）れ」とて、
せめて引き入れたまひて、よろづに言ひ慰めたまふ。「落窪の君とは、この人の名を言ひけるなり。我、言ひつ
ること、いかに恥かしく思ふらむ」といとほし。「継母こそあらめ、中納言さへ憎く言ひつるかな。いとみじ
う思ひたるにこそあめれ。いかで、よくて見せてしがな」と心のうちに思ほす。

(注)○北の方——継母のこと。○おとど——女君の実父。○抱（う）へのきぬ——正装の際の上着。継母の息子のためのもの。

問一 傍線部(イ)・(オ)・(ク)を現代語訳しなさい。

問二 傍線部(エ)「はての言葉は聞こえず」とあるが、なぜこうなったのか。わかりやすく説明しなさい。

問三 傍線部(ア)・(ウ)・(カ)の動作主(主語)はそれぞれだれか。

問四 傍線部(キ)・(ケ)の「れ」を、それぞれ文法的(品詞・終止形・活用形・意味)に説明しなさい。

問五 この文章では、「少将」の、「落窪の君」に関する理解が前半と後半では変化している。それは、どのよ
うな変化か。また、その変化によって「少将」がいかなる心情を抱くようになったか。一〇〇字以内で説明

しなさい(句読点も一字とする)。

第三講

次の文章は、近世の初期に活躍した松水貞徳の歌論『戴恩記』の一節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

基俊の歌見知り給ひたるよしを憎み、ある腹黒き者、⁽¹⁾『後撰集』の中のわるき歌どもの、人知れぬを、己が歌に書きまじへて、見せけるを、なに心なく批判して、かへされければ、⁽²⁾かの者よるこび、手をうちたたき、「^(注)金吾は^(注)梨壺の五人より上手なり。『後撰集』の歌を難ぜし」とて、世上をそしりありきしと、^(注)『無名抄』に鴨長明ののせられたり。⁽³⁾この腹黒き者よりも、長明の心根あさましく、また歌道の本理を知らざるやうに見えて、かへりて恥をかかるるなり。たとへば一集をえらぶは、一瓶の^(注)立花のごとし。花を立つるとて、花ばかりをば立てず。さしもなく草木の枝の、あるいは細く太き、あるいは長く短きを、それぞれにくばりて用ふといへり。その立花をくづして、花なき枯木の上枝^(ほつえ)などばかり、一つ二つづつ持ちて、これをも花瓶より出でたればとて、花とするがごとし。『後撰集』なればとてみなよきならんと定むるは、まづその者のひがごとなり。秀歌といふ物あるにつきて、よからぬ歌もありと知るべし。総別、『古今』一部は一世界を表はし、人の一生涯をかたどるといへり。いづれの集もみなみなかくのごとし。^(注)公任卿和歌の九品^(くほん)をえらび給ひしにも、上品上生の歌^(じやうほんじやうしやう)も、下品下生の歌^(げほんげしやう)も、人丸の御歌ならずや。されば人丸赤人の歌にも、歌屑^(くづ)ありと知るべし。俊成卿の『千載集』「えらばれし時、「われは人をば見ず、ただ歌をのみ見る」と仰せられしも⁽⁴⁾これなり。⁽⁵⁾さしもの基俊梨壺の五人の名に、恐れをなしたまはんや。その難ぜし歌どもを見ば、かならず下品の歌なるべし。もつとも理に当たたりたる事をば、褒美すべき所に、かへりてあやまれりと、今の世まで存ずるは、この道に暗き故なり。この道甚深の秘伝ある故に、いづれの時にも知る人すくなし。知る人すくなきままに、とがなき基俊を、罪人になすなり。

総別この『無名抄』を見るに、基俊のあやまれる事をおほくのせられたる。底心は俊成卿の威勢をそねみて、その俊成卿の師匠を嘲あざけらるるやうに思はるるなり。(b)長明ほどなる世捨て人にも、実の君子ならねば、同芸相妬あやむころざしはうせざると見ゆ。長明は俊恵の弟子なり。俊恵は俊頼の子なり。俊頼と基俊とは、同時の名匠なり。「両雄はかならずあらずふ」習ひなれば、たがひにその非を見付けては難ぜられしと見えたり。

(注)○金吾——衛門府の唐名、左衛門佐基俊を指す。○梨壺の五人——『後撰集』の五人の選者。○『無名抄』——鴨長明撰述の歌論書。

○立花——今日の生け花とは異なり、花や樹を大きな瓶に挿して山水の様子を表現する技芸。

○公任卿和歌の……藤原公任が和歌を九品(極楽浄土の九段階)に分類し、例歌をあげその優劣を論評した『和歌九品』をさす。

問一 波線部(a)(b)を現代語訳しなさい。

問二 傍線部(1)の「歌どもの」の「の」と文法的に同じ用法の「の」を本文中から抜き出し(その前後を抜き出すこと)、その「の」にあたる現代語を答えなさい。

問三 傍線部(2)で「かの者」はなぜ喜んだのか、説明しなさい。

問四 傍線部(4)の「これなり」が指している一文を本文中から抜き出しなさい。

問五 傍線部(3)について、

(ア)「歌道の本理」とは「歌道の真理」という意味であるが、著者が考えている「歌道の本理」は「歌集」でいえるほどのようなことになるか。五〇字程度で説明しなさい。

(イ) 鴨長明に対して、著者が傍線部(3)のような評価を下したのはなぜか。本文全体の論旨をふまえて一二〇字程度で説明しなさい。

第四講

次の文章は三人の女性甲・乙・丙による会話で構成されている。

甲 「あはれ、折りにつけて、^(注)三位入道のやうなる身にて、集を撰^{えら}びはべらばや。『^(A)千載集』こそは、その人のしわざなれば、いと心にくくはべるを、あまりに人にところを置かるるにや、さしもおぼえぬ歌どもこそ、あまた入りてはべるめれ。何事もあいなくなりゆく世の末に、この道ばかりこそ、^(注)山彦の跡絶えず、^(注)柿の本の塵^{ちり}尽きず、とかやうけたまはりはべれ。まことに、聞き知らぬ耳にもありがたき歌どもはべるを、^(注)主のところにはばかり、人のほどに^(注)片去る歌どもにはかき混ぜず撰^えり出でたらば、いかにいみじくはべらむ。いでや、いみじけれども、女ばかり口惜^{くち}しきものなし。昔より^(注)色を好み、道を習^{ともがら}ふ輩^{ともがら}多かれども、女の、いまだ集など選ぶことなきこそ、いと口惜^{くち}しけれ」と言へば、

乙 「必ず、集を選ぶことのいみじかるべきにもあらず。紫式都が『源氏』を作り、清少納言が『枕草子』を書き集めたるより、さきに申しつる物語ども、多くは女のしわざにはべらずや。されば、^(B)なほ捨てがたきものにて我ながらはべり」と言へば、

甲 「さらば、などか、世の末にとどまるばかりの^(注)一ふし、書きとどむるほどの身にてはべらざりけむ。人の姫君、北の方などにて隠ろへばみたらむはさることにて、宮仕^{みやつかへびと}人としてひたおもてに出で立ち、なべて人に知らるばかりの身もちて、『このころはそれこそ』など人にも言はれず、世の末までも書きとどめられぬ身にてやみなむは、いみじく口惜^{くち}しかるべきわざなりかし。昔より、いかばかりのことかは多かめれど、^(C)あやしの^(注)腰折れ一つ詠みて、集に入ることなどだに女はいとかたかめり。まして、世の末まで名をとどむばかりの言葉、言ひ出で、し出でたるたぐひは少なくこそ聞こえはべれ。いとありがたきわざなんめり」など言へば、

丙 例の若き人、「さるにても誰々かはべらむ。昔、今ともなく、おのづから心にくく聞こえむほどの人々思ひ出でて、その中に、少しもよからむ人のまねをしはべらばや」と言へば、

甲 「「D」ものまねびは人のすまじかなるわざを。」(注)淵ふちに入りたまひなむず」と言ひて笑ふ。

(『無名草子』による)

(注)○三位入道——藤原俊成。○山彦の跡——「絶えず」の序詞。○柿の本の塵——「尽きず」の序詞。○主——歌の作者。○片去る——かたよる。

○色——情趣。○一ふし——一篇。○腰折れ——下手な歌。○淵に入りたまひなむず——未詳。当時のことわざか。

問一 (A)について甲はこの勅撰集のどういう点に不満を感じているか。当時の和歌に対する認識を明らかにし
たうえで説明しなさい。

問二 (B)の中の「捨てがたきもの」は何を指すか、記しなさい。

問三 (B)について乙はなぜそう述べたのか、説明しなさい。

問四 甲はということが「口惜し」と述べているか、二つにまとめなさい。

問五 (C)について甲はなぜそう述べたのか、説明しなさい。

問六 (D)について甲はなぜそう述べたのか、説明しなさい。

問七 文章全体で展開されている女性論は、宮中に出仕する女房のみを対象としたもので、議論の対象から外された女性たちが存在する。その女性たちはどのような人々か、説明しなさい。

第五講

次の文章は、『俊頼髓脳』の一節である。本文を読んで、後の設問に答えよ。

(A) あられ降る交野かとののみの狩衣濡れぬ宿かす人しなれば

(B) 濡れ濡れもなほ狩り行かむはし鷹の上毛の雪をうちはらひつつ

これは、道済、長能と申す歌よみどもの、鷹狩を題にする歌なり。ともによき歌どもにて、人の口にのれり。後、人びと、我も我もとあらそひて、日ごろへけるに、なほ(C)このこと、今日きらむとて、ともに具して、四条大納言のもとにまうでて、「この歌ふたつ、たがひにあらそひて、今に事きれず。いかにもいかに、判ぜさせ給へ」とて、おのおの参りたるなり」といへば、かの大納言、この歌どもを、しきりにながめ案じて、「まことに申したらむに、おのおの腹立たれじや」と申しければ「さらに、Xもかくも仰せられむに、腹立ち申すべからず。その料に参りたれば、すみやかに承りて、まかり出でなむ」と申しければ、「さらば」とて、申されるは、「交野のみの」といへる歌は、ふるまへる姿も、文字遣ひなども、はるかにまさりて聞ゆ。しかはあれども、もろもろのひが事のあるなり。鷹狩は、(D)雨の降らむばかりにぞ、えせでとどまるべき。霰のふらむによりて、宿かりてとまらむは、あやしき事なり。霰などは、さまで、狩衣などの濡れ通りて惜しき程にはあらじ。なほ狩り行かむと詠まれたるは、(E)鷹狩の本意もあり、まことに、おもしろかりけむと覚ゆ。歌がらも優にてをかし。集などにもこれや入らむ」と申されければ、道済は、舞ひかなでて出でにけり。

問一 傍線部(A)の和歌に使用されている修辞技巧を、次の①～④の中から一つ選べ。

- ① 掛詞 ② 枕詞 ③ 序詞 ④ 物名

問二 傍線部(C)「このこと、今日きらむ」を「このこと」の内容がわかるように、句読点とも三十字以内で現代語訳せよ。

問三 空欄部Xに入れるのに最も適当な平仮名一字を書け。

問四 傍線部(D)「雨の降らむばかりにぞ、えせでとどまるべき」を現代語訳せよ。

問五 (ア)「鷹狩の本意」の意味として最も適当なものを、次の①～④の中から一つずつ選べ。

- ① 鷹の狩猟本能 ② 鷹の勇敢な性格 ③ 鷹狩本来の手段 ④ 鷹狩の本質的な性格

問六 傍線部(B)の和歌について。

(I) 作者は誰か。本文中の呼称で答えよ。

(II) そのように判断できる理由を句読点ともに四十字以内で説明せよ。

問七 本文中に述べられている四条大納言の考え方を簡潔に答えよ。

問八 『俊頼髓脳』と同じジャンルのものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

① 玉勝間

② 方丈記

③ 無名抄

④ 宇治拾遺物語

⑤ おらが春

〈第一講〉

次の文を読んで、あとの間に答えよ。(五〇点)

むかし朱買臣⁽¹⁾、会稽⁽²⁾といふ所にすみけり。よにまづしくわりなくてせんかたなかりけれど、ふみをよみ物をならふ事おこたらず、そのひまにはたき木をこりて世をわたるはかりごとをしけり。かくて年月ふるに、あひぐしたりける女、かぎりなくまづしきすまひをたへがたくや思ひけん、「我もひとあらぬさまになりて、世をこころみん」などこまやかにうちかたらひければ、「かくてしもやありはつべき。ことしばかり心づよくあひ念ぜよ」とよろづこしらへけれど、つひにきかでそのとしのうちにはなれにけり。夫こひかなしめどもいふかひなくてつぎのとしにもなりぬるに、この人の才学よにすぐれたる事をみかどきかせ給ひてその国の守になされぬ。^(注)はじめて国に下りけるありさま、心言葉もおよばずめでたかりけり。かかれどもなほありし妻の事を心にかけてひと国のうちをたづねもとめさすれど、にたる人なくてあかしくらす。園にいでて狩りしあそびける時、事もなのめならずあやしくわびしげなるしづのめが、^(注)かたみといふ物をひぢにかけて菜をつみてゐざりありくを、ゆゆしげなるものすがたかなとみる程に、我がむかしのともに見なしてけり。なほひがめにやと目をとめて見けるにかにもたがふ所なかりければ、ひとしれずかなしくぼえて、くるるやおそきとよびとりてけり。女、⁽³⁾あやまつ事もなきにいかなる事にあたりなんずるにかとおそれまどひけれど、ありしむかしの事などをこまやかにかたらひければ、女あさましくおぼえてこの夫のうちみるよりいかがおもひけん、いたくなやみわづらひて暁がたにたえ入りにけり。

もろともににしきをきてやかへらましうきにたへたる心なりせば
心みじかきはなにごとにつけてもうらみをのこさずといふ事なし。

(注)○はじめて国に下りける——国守として任国に赴いたこと。

○かたみ——かこ。

問一 傍線部(1)～(3)を現代語訳せよ。

問二 傍線部(A)について、(イ)誰のどのような行為かを説明せよ。(ロ)その行為は、どのような心情の現れか、考えて記せ。(解答欄Ⅱ(イ)は13センチ×2センチ・(ロ)は13センチ×3センチ)

問三 傍線部(B)の歌を、男の詠んだものとして解釈せよ。(解答欄Ⅱ14センチ×4センチ)

〈第二講〉

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

宗俊の大納言、御母は宇治大納言隆国のむすめなり。管絃の道すぐれておはしましける。時光といふ笙の笛吹きに習ひ給ひけるに、大食調の入調を、「いまいま」とて、年へて教へ申さざりけるほどに、雨かぎりなく降りて、暗闇しげかりける夜、出で来て、「今宵、かのもの教へてたてまつらむ」と申しければ、よろこびて、「とく」とのたまひけるを、「殿の内にては、おのづから聞く人も侍らむ。大極殿へ渡らせ給へ」といひければ、さらに牛など取り寄せておはしけるに、「御供には、人侍らでありなむ。時光ひとり」とて、蓑笠着てなむありける。大極殿におはしたるに、「なほおぼつかなく侍り」とて、続松取りて、さらに火ともして見ければ、柱に蓑着たる者の立ち添ひたるありけり。「かれは誰ぞ」と問ひければ、「武能」と名のりければ、「さればこそ」とて、その夜は教へ申さで、帰りにけりと申す人もありき。また、「かばかりこころざしあり」とて、教へけりとも聞こえ侍りき。それはひがごとくや侍りけむ。

(『今鏡』)

(注)○大食調の入調——笙の秘曲の一つ。

○武能——平安時代の樂人。

〔設問〕

- (一) 「御供には、人侍らでありなむ」(傍線部(ア))を現代語に訳せ。
- (二) 「なほおぼつかなく侍り」(傍線部(イ))を、何が「おぼつかない」いかがわかるように、ことばを補って現代語に訳せ。

せ。

(三) 「かばかりこころざしあり」(傍線部(ウ))とあるが、だれの、どういう行動を、どういうふうに判断されるというのか、説明せよ。

(解答欄…一四センチ×二行)

次の文を読んで、あとの問に答えよ。目(五〇点)

伏見中納言といひける人のもとへ西行法師ゆきてたづねけるに、あるじはありきたがひたるほどに、侍の出でて、「何事いふ法師ぞ」といふに、縁に尻かけてゐたるを、⁽¹⁾けしかる法師の、かくしれがましきよと思ひたるけしきにて、侍にらみおこせたるに、御簾のうちに箏しやうの琴にて⁽²⁾秋風樂をひきすましたるをききて、西行この侍に、「物申さむ」といひければ、にくしとは思ひながら立ちよりて、「何事ぞ」といふに、「⁽³⁾御簾のうちへ申させたまへ」とて、⁽⁴⁾ことに身にしむ秋の風かな

といひいでたりければ、「にくき法師のいひごとなかな」とて、⁽⁵⁾かまちははりてけり。西行はふはふ帰りてけり。のちに中納言の帰りたるに、「かかるしれものこそ候ひつれ。はりふせ候ひぬ」とかしこがほに語りければ、「西行にこそありつらめ。⁽⁶⁾ふしぎのことなり」とて、心うがられけり。この侍をばやがて追ひ出してけり。

(「今物語」)

(注)○秋風樂——雅楽の曲名。

○かまち——頬骨・顎骨のあたり。

問一 傍線部(1)～(3)を現代語に訳せ。

問二 傍線部(A)「御簾のうちへ申させたまへ」とは、御簾のうちの人に、西行がどういふことを求めたのか。(解答欄

11 14センチ×3.5センチ)

問三 傍線部(B)「ことに身にしむ秋の風かな」という下の句は、表面的には「今日はことさら秋の風がつめたく身にしてみて感じられます」というほどの意であるが、それを、

(1) 西行はどのような意味をこめて詠んだのか、

(2) 侍はどのような意味のこめられたものと解したのか、解説せよ。(解答欄Ⅱ(1)(2)とも13センチ×4.5センチ)

問四 傍線部(C)「ふしぎのことなり」とは、「常識的には考えられぬことだ」というほどの意である、これは、誰がどうしたことに對する批判か。(解答欄Ⅱ14センチ×4センチ)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

かかる程に、三位中将殿、土御門の源氏の左大臣殿の御女二ところ、嫡妻腹にいみじくかしづき奉りて、后がねとおぼしきこえ給ふを、いかなるたよりにか、この三位殿、この姫君をいかでと心深う思ひきこえ給ひて、^(a)けしきだちきこえ給ひけり。されど、大臣、^(b)「あな物狂ほし。ことのほかや。^(b)誰かただ今さやうに口わき黄ばみたるぬしたち出し入れては見んとする」とて、ゆめにきこしめし入れぬを、母上、例の女に似給はず、いと心かしくかどかどしくおはして、「などてか、ただこの君を婿にて見ざらん。ときどき物見などに出て見るに、この君ただならず見ゆる君なり。ただ我に^(c)任せ給へれかし。この事悪しうやありける」ときこえ給へど、殿、「すべてあべい事にもあらず」とおぼいたり。この大臣は、腹々に男君達いとあまた、さまざまにておはしけり。女君達もおはすべし。この御腹には、女君二ところ、男三人なんおはしける。弁や少将などにておはせし、法師になり給ひにけり。またおはするも、世の中をいとはかなきものにおぼして、^(d)ともすればあくがれ給ふを、いとうしろめたき事におぼされけり。かくて、この母上、この三位殿の御事を心づきにおぼして、ただいそぎに急がせ給ふを、殿は心もゆかずおぼいたれど、ただ今のみかどいと若うおはします、東宮もまたさやうにおはしませば、内、東宮と^(e)おぼしかくべきにもあらず。また、^(e)さべい人などの、ものものしうおぼすさまなるも、ただ今おはせず。閑院の大將などこそは、北の方年老い給ひて、ありなしにてきこえなどすめれど、かの枇杷の北の方などの煩はしくて、この母北の方、きこしめし入れず。ただこの三位殿を急ぎたち給ひて、婿どり給ひつ。その程の有様、^(f)いとわざとがましくやむごとなくもてなしきこえ給へれば、摂政殿、「位などまだいと浅きが、かたはらいたきこと。いかにせん」とおぼしたり。

() 『栄花物語』

(注) ○三位中将——藤原道長。○土御門の源氏の左大臣——源雅信。○嫡妻腹——正妻から生まれた子。○后がね——後の候補者。

○閑院の大将——藤原朝光。○ありなしにて——いるのかいないのか分からないような状態で。
○枇杷の北の方——故源延光の妻。当時は朝光が通っていた。○撰政殿——道長の父、兼家。

問一 傍線部(1)(2)を現代語訳せよ。

問二 傍線部(a)は、具体的にはどうしたというのか、十字以内で答えよ。

問三 傍線部(b)には、誰の、誰に対する、どのような評価が示されているか、説明せよ。

問四 傍線部(c)を品詞に分解せよ。活用語については活用形も記すこと。

問五 傍線部(d)は、誰が、どういうことについて「おぼしかくべきにもあらず」なのか、わかりやすく説明せよ。

問六 (I) 傍線部(e)に用いられている音便について説明せよ。

(II) 傍線部(e)は、具体的にはどういう人を指しているか、簡潔に述べよ。

〈第五講〉

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

東北の菩提ぼだい講かう始めける聖せいは、もとはいみじき悪人にて、人屋ひとやに七度ななたびぞ入りたりける。七度といひける度、検非違使けびゐしども集まりて、「これはいみじき悪人なり。一、二度人屋にゐむだに、人としてはよかるべきことかは。ましていくそばくの犯しをして、かく七度までは、あさましくゆゆしきことなり。この度これが足切りてむ」と定めて、足切りに率ひてゆきて、切らむとする程に、いみじき相人あうじんありけり。それが物へいきけるが、この足切らむとする者に寄りて言ふやう、「ここの人、おのれに許されよ。これはかならず往生すべき相ある人なり」と言ひければ、「よしなきこと言ふ、物も覚えぬ相する御房かな」と言ひて、ただ切りに切らむとすれば、その切らむとする足の上に登りて、「この足の代りに、わが足を切れ。往生すべき相ある者の足切らせては、いかでか見むや。おうおう」とをめきければ、切らむとする者どもしあつかひて、検非違使に、「かうかうのこと侍り」と言ひければ、やんごとなき相人の言ふことなれば、さすがに用ゐずもなく、別当に、「かかることなむある」と申しければ、「さらば許してよ」とて、許されにけり。その時、この盗人心おこして、法師になりて、いみじき聖になりて、この菩提議は始めたるなり。まことに相かなひて、いみじく終りとりてこそ失せにけれ。

かかれば、高名かうなむせむずる人はその相ありとも、おぼろけの相人の見ることにてもあらざりけり。始めおきたる講も今日まで絶えぬは、まことにあはれなることなりかし。

(『宇治拾遺物語』)

(注)○人屋——獄舎。

○東北院の菩提講——極樂浄土を願って、念仏を唱え、法華経を講ずる法要。

〔設問〕

(一) 傍線部(ア)・(イ)・(ウ)・(エ)を現代語に訳せ。

(二) 「往生すべき相ある者の足切らせては、いかでか見むや」(傍線部(エ))とあるが、相人はなぜそう言ったのか、わかりやすく説明せよ。

(解答欄…一三・五センチ×二行、(三)も同じ)

(三) 「高名せむずる人はその相ありとも、おぼろけの相人の見ることにてもあらざりけり」(傍線部(カ))とあるが、どういうことを言おうとしているのか、わかりやすく説明せよ。

〈第六講〉

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

昔、男ありけり。いかがありけむ、その男てすまずたりにけり。のちに男ありけれど、子ある仲なりければ、こまかにこそあらねど時々もの言ひおこせけり。女がたに、絵描く人なりければ、描きにやれりけるを、今の男のものすとて、一日二日おこせざりけり。かの男、いとつらく、「おのが聞こゆることをば、いままでたまはねば、ことわりと思へど、なほ人をば恨みつべきものになむありける」とて、弄ろうじて詠よみてやれりける。時は秋になむありける。

秋の夜は春日忘るるものなれや霞に霧や千重ちへまさるらむ
となむ詠めりける。女、返し、

千々の秋ひとつの春にむかはめや 紅葉も花もともにこそ散れ

(『伊勢物語』)

〔設問〕

(一) 「すまずなりにけり」(傍線部(ア))とは、どういうことか、説明せよ。

(解答欄…一三・五センチ×一行)

(二) 「おのが聞こゆることをば、いままでたまはねば」(傍線部(イ))とあるが、具体的な状況がわかるように現代語に訳せ。

(三) 「紅葉も花もともにこそ散れ」(傍線部(ウ))とあるが、どういう気持ちがかめられているか、説明せよ。

(解答欄…一三・五センチ×二行)

〈第七講〉

次の文章は「今様」好きで知られる後白河院の編著とされる『りょうじんひしやうくでんしゆう梁塵秘抄口伝集』の一節である。後白河院が今様の師である乙前のことを回想したこの文章を読んで、問一〜問七に答えなさい。

乙前八十四といひし春、病やまひをしてありしかど、いまだつよつよしかりしに併あはせて、別べちの事もなかりしかば、さりともと思ひしほどに、ほどなく(a)大事(a)になりたる由告げたりしに、近く家を造りて置きたりしかば、近々に忍びて行きてみれば、女むすめにかき起されて対むかひて居たり。弱よわげに見えしかば、結縁けちえんのため法華経一卷をよみて聞かせてのち、「(b)歌や聞かむと思ふ」と言ひしかば、喜びて急いそぎうなづく。

(c) 像法転じては 薬師の誓ひぞ頼もしき

ひとたび御名を聞く人は よろずの病やまひ無しとぞいふ

二三返べんばかりうたひて聞かせしを、経よりも賞めで入りて、「これを承るぞ、命も生き候ひぬらん」と、手を擦すりて、泣く喜びしありさま、あはれにおぼえて帰りにき。そののち、仁和寺理趣三昧にんなじりしゆざんまゐに参りて候ひしほどに、二月十九日に早く亡かくれにし由を聞きしかば、惜(d)しむべき齡よさひにはなれど、年来見馴れしに、あはれさ限りなく、世のはかなさ、後れ先立つこの世のありさま、今にはじめぬことなれど、思ひつづけ(e)られて、多く歌習ひたる師なりしかば、やがて聞きしよりはじめて、朝あしたには懺法せんぽうをよみて六根を懺悔ざんげし、夕ゆふべには阿弥陀経あみだをよみて西方さいほうの九品往生くほんを祈ること、五十日勤め祈りき。一年が間、千部の法華経をよみ了をりて、次の年二月十九日、やがて申し上げてのちに、法華経一部をよみてのち、(A) (をこそ) B) よりも賞めでしかと思ひて、あれに習ひたりし今様、主むねとあるうたひてのち、暁方あかつきがたに足柄十首・黒鳥子

・伊地古・旧川ふるかわなどうたひて、果てに長歌をうたひて、後世ごせのために弔とらひき。〔1〕それをも知らで、里にある女房丹波、夢に見るやうは、法住寺の広所にて、わが歌をうたひけるを、五条尼あま、白き薄衣うすぎぬに足を裹つつみて参りて、障子のうちにあて、差し対ひて、「この御歌を聞きに参りたる」とて、世に賞でて、我も付けてうたひて、「足柄など常にも候はぬ。この節どものめでたさよ」と褒ほめ入りて、長歌を聞きて、「〔2〕これはいかがとおぼつかなく思ひ候ひつるに、めでたさよ。これを承り候へば、身も涼しく、うれしき」と見て、兩三日ありて、かく見え候ひつる由を、女房参りて申す。さは、聞きけるにや。しかじかありし由を語りて、我と女房たちもあはれがり合ひたりき。そののち、その日は必ずうたひて後世を弔ふなり。この乙前に、十余年が間に習ひ取りてき。昔そのかみこれかれを聞き取りてうたひ集めたりし歌どもをも、一筋を徹とほさむために、みなこの様に違たがひたるをば習ひ直して、残ることなく瀉瓶しゃびやうし了りにき。年来かばかり嗜たしなみ習ひたる事を、誰にても伝えて、その流れなども、のちには言はればやと思へども、習とまふ輩ともがらあれど、これを継ぎ次ぐべき弟子のなきこそ遺恨の事にてあれ。殿上人・下臈げらふにいたるまで、相具してうたふ輩は多かれど、これを同じ心に習ふ者は一人なし。

(注)○結縁——仏道と縁を結ぶこと。○像法——釈迦の入滅後、正法の次に来る、正法よりやや劣つた世の中。像法の次には末法が来る。

○薬師——薬師如来のこと。○仁和寺理趣三昧——仁和寺で行われる理趣経を誦する修行。

○懺法をよみて六根を懺悔——懺悔の修行を行い、眼・耳・鼻・舌・身・意の六つの感覚を清浄にすること。

○阿弥陀経をよみて西方の九品往生を祈る——阿弥陀経を読んで、西方極楽世界への往生を祈ること。○主とある——主なもの。

○足柄十首、黒鳥子、伊地古、旧川、長歌——いずれも今様の曲名またはスタイル名。○里にある——実家に下がっている。

○法住寺——後白河院が御所とした寺。○五条尼——乙前の別名。○瀉瓶——瓶かめの水をそっくり移すように、ものごとを残らず伝えること。

問一 傍線部(a)、(d)、(g)の現代語訳をなさい。

問二 傍線部(b)は誰の発言か。

問三 傍線部(c)の今様を歌ったことには、どのような気持ちが入められているか、今様の内容も考えて説明しなさい。

問四 傍線部(e)の「られ」を、文法的に説明しなさい。

問五 (A)と(B)に入るふさわしい語を書きなさい。

問六 傍線部(f)の「それ」とは具体的にどのようなことを指すのか、三四字程度で説明しなさい。

問七 最後の段落(「この乙前に……」から始まる六行)の中に述べられている、今様の伝統とその将来に関する後白河院の思いを一〇〇字以内でまとめなさい。

次のA・Bの文章を読んで、後の設問に答えよ。

A

栗田殿(藤原道兼)の御男君達ぞ三人おはせしが、太郎君は福足君と申しを、⁽¹⁾幼き人はさのみこそはと思へど、いとあさましうまさなう悪しくぞおはせし。

東三条殿(藤原兼家)の御賀に、この君舞をせさせ奉らむとて、習はせたまふほども、あやにくがり、すまひたまへど、よろづに⁽²⁾をこつり、祈りをさへして、教へきこえさするに、その日になりて、いみじうしたて奉りたまへるに、舞台の上昇りたまひて、物の音、調子吹き出づるほどに、わざはひかな、「吾は舞はじ」とて、角髪ひき乱り、御装束はらはらと引き破りたまふに、栗田殿、御色ま青にならせたまひて、あれかにもあらぬ御気色なり。ありとある人、「⁽³⁾さ思ひつることよ」と見たまへど、すべきやうもなきに、御をぢの中関白殿(藤原道隆)の下りて、舞台に昇らせたまへば、「言ひをこつらせたまふべきか、また、憎さにえ堪えず、追ひおろさせたまふべきか」と、かたがた見侍りしに、この君を御腰のほどに引きつけさせたまひて、御手づからいみじう舞はせたまひたりしこそ、樂もまさりおもしろく、かの君の御恥もかくれ、その日の興もことのほかに増さたりけれ。祖父殿(藤原兼家)もうれしとおぼしたりけり。父大臣はさらなり、よその人だにこそ、すずろに感じ奉りけれ。⁽⁴⁾かやうに人のためになさけなさけしきところおはしましけるに、など御すゑかれさせたまひにけむ。

この君、くちなは凌じたまひて、そのたたりにより、かしらに物はれて、亡せたまひにき。

(『大鏡』より)

B

福足といひ侍りける子の、遣水に菖蒲を植ゑをきて⁽¹⁾亡くなり侍りにける後の年、生ひ出でて侍りけるを見侍りてしのべとやあやめも知らぬ心にもながからぬ世のうきに植ゑけむ

栗田右大臣

（注）○をこつる——だましすかす、機嫌をとる。

問一 傍線部（1）について、

（イ） 現代語訳せよ。

（ロ） 「さ」が指示する部分を、原文のまま抜き出せ。

問二 傍線部（2）を、「さ」が指示する内容が分かるように現代語訳せよ。

問三 傍線部（3）を現代語訳せよ。

問四 傍線部（4）の「亡くな」った事情は、A文から知られる。それを現代語で述べよ。

問五 B文中の歌の、「あやめ」は「菖蒲」の意と「文目、すなわち物事の道理・分別」を掛けている。また「うき」は「憂き」と「泥、すなわち水分の多い泥深い地」を掛けている。それに留意して歌の意味を解説せよ。

次の文を読んで、あとの問に答えよ。(五〇点)

吾が師常によみ出らるる歌、いと遅吟にして、人の許もとにゆきて、そのむしろにのぞみてよまるる歌も、ある時はけふはよみ得ぬなりとて、ひねもす考へられたるままにて、空しく帰らるる事度々なりき。文詞なども、筆とられてより、幾度か稿をかへて、なほ心に落ちぬほどは、そのまま厨子の内に巻き入れおかれて、心のおもむけるをり取出ては、消し補ひなどせられし事常なり。されば①みづから許して、清書せらるるに及びては、誤れる事をささなかりしなり。荒木田久老神主は、その心掟大に異にして、早吟なるのみならず、序文など人に乞はれて物せらるるをりなども、筆をとりて紙に對むかへば、詞腸たちまちに動くとして、案をも設けず、ただちに筆を下されしとぞ。秀才なる事はほめ聞こゆべき事なれど、さればこそその文詞、ともすれば考へたらぬ事の打交じるをり有りき。又余りに筆の走るに任せられて、深く考へらるるまではなかりし事も有りしとぞ。今いづれをかよしといはん。我が家の仏尊ぶとはあらねど、俊頼口伝抄にもいはれたる事有りき。その詞に、②なほ歌をよまんには、いそぐまじきなり。いまだ昔よりとくよめるには、かしこき事なし。されば貫之などは、歌一首を十日廿日にこそよみたれと有り。かくいにしへ人のいひおかれたるを思ふにも、口ときのみすぐれたる事とはいひがたかるべし。然のみならず、たとひ筆とりて、すなはちなれる文詞なりとも、その時こそいちはやき筆づかひをほめて、いささかの疵きずあらんも見許してはめづべけれ。後世に伝はりたらんに、③誰か見る人ごとにむかひて、「この文は案をも設けずものしたるなり、さればいささかの疵は有りぬべき事よ」とは、ことわりいふ人のあらん。そのをりはたとひ千度百度書き消し書き改むとも、疵なき玉とならんには、後世に伝はりて、誰人もげにとめづべき物なるをや。この劣り優りいかにあるらん。世の歌人のさだめいふところ聞かまほし。

() 『泊たふ筆話』より

(注) ○むしろ——席。○詞腸——詩を作る心。○我が家の仏尊ぶ——自分の方のものはすべてがよいと思つてゐることのたとえ。

○俊頼口伝抄——平安時代の歌人源俊頼の著した歌論書「俊頼髓脳」のこと。

問一 傍線部(1)と(3)を現代語訳せよ。

問二 早吟の人に対する筆者の考えを簡潔にまとめよ。

(解答欄〓タテ14センチ×ヨコ7センチ)

問三 筆者は、遅吟の作と早吟の作が後世どのような評価を受けるといふのか、作られた当時の評価と比較しながらわかりやすく説明せよ。

(解答欄〓タテ14センチ×ヨコ8センチ)

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

かくて四条の大納言殿は、内うちの大殿おほどのの上の御事のちの後のちは、よろづ倦うんじはて給ひて、つくづくと御おこなひにて過ぐさせ給ふ。法師と同じさまなる御有様なれど、「アアこれ思へばあいなきことなり。一日ひとひにても出家の功德、世に勝すぐれをめでたかんなるものを、今しばしあらば、御みくしげどの匣殿のの御事など出いで来て、いとど見捨てがたく、わりなき御ほだし絆にこそおはせめ。さらば、このほどこそよきほどなれ」と思おぼしとりて、人知れずさるべき文ふみども見したため、御みしやう庄のの司つかさども召してをあるべき事きどものたまはせなどして、なほ今年と思すに、女御の、なほ人知れずあはれに心細く思されて、「人の心はいみじういふかひなきものにこそあれ。などておぼゆべからむ」と、(三)いと我ながらもくちをしう思さるべし。何ごとかはあると思しまはしつ、人知れず御心ひとつを思しまどはすも、いみじうあはれなり。この御本意ほいありといふことは、女御殿も知らせ給へれど、(オ)いつといふことは知らせ給はず。

かかるほどに、権しひを人の持てまゐりたれば、女御殿の御方へ奉らせ給ひける。御箱ふたの蓋を返し奉らせ給ふとて、女御殿、(カ)ありながら別れむよりはなかなかになくなりたるこの身ともがなと聞こえ給ひければ、大納言殿の御返し、

奥山の権もとが本もとをし尋ね来こばとまるこの身を知らざらめやは女御殿、いとあはれと思さる。

(『栄花物語』)

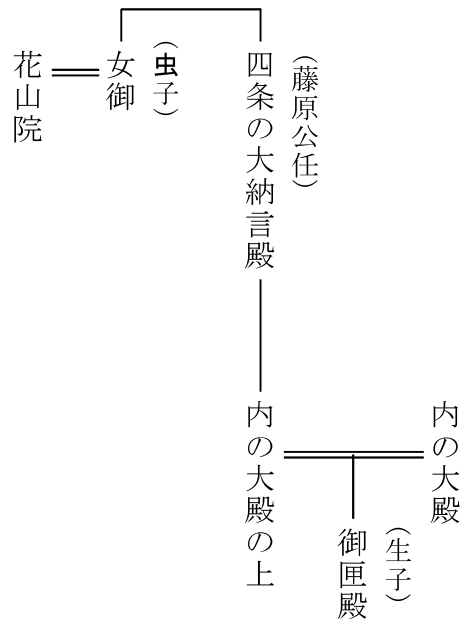
(注)〇四条の大納言殿——藤原きんとう公任(九六六—一〇四一)。

〇内うちの大殿おほどのの上の御事のち——藤原教通のりみちの室むろであった公任の娘の死を指す。

〇御匣殿みくしげどのの御事のち——公任の孫娘生子が東宮妃となる事。

〇さるべき文ふみども見したため——出家を決意して領地の地券などの処置をして。

○御庄の司——公任の所有する荘園の管理人。
 ○女御・女御殿——公任の姉妹で、花山院女御の虫子。○椎——シイの木の実。
 (藤原教通)



設問

(一) 「これ」(傍線部ア)はどのようなことを指しているか、説明せよ。

(解答欄〓一三・六センチ×一行)

(二) 傍線部(イ)・(ウ)を現代語訳せよ。

(解答欄〓それぞれ一三センチ×一行)

(三) 「いと我ながらもくちをしう」(傍線部エ)とあるが、何が「くちをし」なのか、簡潔に説明せよ。

(解答欄〓一三・六センチ×一五行)

(四) 傍線部(オ)について、具体的な内容がよくわかるように現代語訳せよ。

(解答欄 〓 一三・六センチ×一行)

(五) 傍線部(カ)の歌について、一首の大意を述べよ。

(解答欄 〓 一三・六センチ×一行)

〈予備問題〉

次の文章は、唐土へ出立する息子成尋阿闍梨を思う母のものである。作者は成尋のもとにいたが、門出の直前にそこから仁和寺へと移された。そのことを嘆き、作者は成尋に別れを悲しむ歌を送った。その翌朝、成尋から手紙をもらったところから、この文章は始まる。結局成尋は、母に会わずに出発してしまった。これを読んで、後の設問に答えよ。

その朝、文おこせ給へる。つらけれど急ぎ見れば、「夜のほど何事か。昨日の御文見て、よもすがら涙もとまらず侍りつる」とあり。見るに、文字もたしかに見えず。涙のひまもなく過ぎ暮らす。

からうじて起き上がりて見れば、仁和寺の前に、梅の木にこぼるるばかり咲きたり。居る所など、みなし置かれたり。^(一)心もなきやうにて、いづ方西なども覚えず。目も霧りわたり、夢の心地して暮らしたるまたの朝、京より人来て、「今宵の夜中ばかり出で給ひぬ」と言ふ。起き上がられで、言はん方なく悲し。

またの朝に文あり。目も見あけられねど、見れば、「参らんと思ひ侍れど、^(二)夜中ばかりに詣で来つれば、返す返す静心なく」とあり。目もくれて心地も感ふやうなるに、送りの人々集まりて慰むるに、ゆゆしう覚ゆ。「やがて八幡と申す所にて船に乗り給ひぬ」と聞くにも、おぼつかなき言ふ方なき。

船出する淀の御神も浅からぬ心を汲みて守りやらなむと泣く泣く覚ゆる。

「^(三)あさましう、見じと思ひ給ひける心かな。あさましう」と、心憂きことのみ思ひ過ぐししかば、また「^(四)この人のまことにせんと思ひ給はんことたがへじ」など思ひしことの、阿闍梨に従ひて、^(五)かかることもいみじげに泣き妨げずなりにし、この日ごろの過ぐるままにくやしう、「手を控へても、居てぞあるべかりける」とくやしう、涙のみ目に満ちて物も見えねば、

しひて行く船路を惜しむ別れ路に涙もえこそとどめざりけれ

（注）○八幡——京都府南西部の地名。淀川に面し、石清水（男山）八幡宮がある。

設問

- （一） 傍線部（ア）・（ウ）・（エ）・（オ）を、わかりやすく現代語訳せよ。（解答欄Ⅱそれぞれ一三・〇センチ×一行）
- （二） 傍線部（イ）を、事情がよくわかるように現代語訳せよ。（解答欄Ⅱ一三・六センチ×一・五行）
- （三） 傍線部（カ）はどのような作者の心情を述べたものか、説明せよ。（解答欄Ⅱ一三・六センチ×一・五行）

次の文は、安永元年（一七七二）、本居宣長四十三歳のときの大和旅行記『菅笠日記』（一名『吉野紀行』）の一節である。これを読んで問いに答えよ。

なほ、山の岨路そぼちをゆきゆきて、初瀬はつせ近くなりぬれば、向かひの山間やまあひより、葛城山かづらき、畝傍山うねびなどはるかに見え初めたり。よその国ながら、かかる名所などころは、明け暮れ書ふみにも見なれ、歌にも詠みなれてしあれば、（イ）ふるさと人などの逢へらん心地して、打ちつけに睦ましく覚ゆ。けはひ坂とて、嶮さかしき坂をすこし下る。この坂路より、初瀬の寺も里も、目の前に近く、あざあざと見渡されたる景色、えも言はず。大方ここまでの道は、山懐にて、殊なる見る目もなかりしに、さしも巖いめしき僧坊、御堂の立ち連なりたるを、にはかに見つけたるは、（ロ）あらぬ世界に來たらん心地す。与喜よきの天神と申す御社の前に、下り着きて、そこに板橋渡せる流れぞ、初瀬川なりける。向かひはすなはち初瀬の里なれば、人宿す家に立ち入りて、物食ひなどして休む。後ろは川岸に片掛けたる屋なれば、波の音ただ床ゆかのもとにとどろきたり。

（A）初瀬川はやくの世より流れ来て名に立ちわたる瀬々の岩波

さて御堂に参らんとて出で立つ。まづ門を入りて、呉橋をのぼらんとする所に、誰がことかは知らねど、道明の塔とて、右の方にあり。ややのぼりて肱折ひぢるる所に、貫之の軒端の梅といふもあり。又、蔵王堂、産霊むすぶの神の祠ほこらなど並び立てり。ここより上を雲居坂といふとかや。かくて御堂に参り着きたるに、折しも御帳掲げたるほどにて、いと大きな本尊の、きらきらしうて見え給へる、人も拝めば我も伏し拝む。さてここかしこ見巡るに、この山の花ぞ大方の盛りはやや過ぎにたれど、なほ盛りなるも所々に多かりけり。巳みの時とて貝吹き鐘つくなり。むかし清少納言が詣でし時も、にはかにこの貝を吹き出でつるに、驚きたるよし、書き置ける、思ひ出でられて、（ハ）そのかみの面影も見るやうなり。鐘はやがて御堂の傍ら、今のぼり来し呉橋の上なる楼になん掛かれりける。

（B）名も高く初瀬の寺のかねてより聞き来し音を今ぞ聞きける

古き歌どもにも、あまた詠みける、いにしへの同じ鐘にやと、いとなつかし。かかる所からは、殊なる事なき物にも、見聞くに付けて心のとまるは、すべて古を慕ふ心の癖なりかし。(中略)

また御堂の内を通りて、かの貫之の梅の前より片つ方へすこし下りて、学問する大徳達の庵のほとりに、二本の杉の跡とて小さき杉あり。またすこし下りて、定家の中納言の塔なりといふ、五輪なる石立てり。(三)この頃やうの物にて、いとしも承けられず。八塩の岡といふ所もあり。なほ下りて川辺に出で、橋を渡りて彼方の岸に、玉葛の君の跡とて、庵あり。墓もありといへど、今日は主の尼、物へまかりて、なきほどなれば、門鎖したり。すべてこの初瀬に、その跡かの跡とてあまたある、みなまことしからぬ中にも、この玉葛こそ、いともいともをかしけれ。かの源氏物語は、なべて虚事ぞとも弁へで、まことにありけん人と思ひて、かかる所をも構へ出でたるにや。

(注)○貫之の軒端の梅——紀貫之が長谷寺参詣の折に「ひとはいさ心もしらずふるさは花ぞ昔の香に匂ひける」(古今集・春上)の歌を詠んだと伝えられる梅の木。

○むかし清少納言が詣でし時——『枕草子』の「正月に寺に籠もりたるは」の段をさす。ただし今日流布の『枕草子』では、清水寺のこととなっているが、宣長が読んでいた江戸時代の版本では長谷寺のこととする。

○二本の杉——『古今集』の旋頭歌に「初瀬川ふる川の辺に二本ある杉 年を経てまたもあひ見む二本ある杉」と詠まれた有名な杉。

○玉葛の君——『源氏物語』の登場人物。玉葛巻に初瀬詣でをして光源氏の女房と巡り会い、源氏の養女となった姫君。

問1 傍線部(イ)～(ニ)を、わかりやすく口語訳せよ。

問2 傍線部(へ)～(ち)の意味を具体的に述べた上で、傍線部(ホ)の意味を十字以内で記せ。

問3 歌(A)、(B)における掛詞を指摘せよ。ただし(A)については二箇所。

問4 本居宣長は『古事記伝』や『源氏物語玉の小櫛』といった我が国古典研究の名著を残した学者である。宣長のその

ような研究は何と呼ばれるか。

問5 問4のような研究に従事した著名な学者を二名挙げよ。ただし漢字で書くこと。

次の文章をよく読んで、後の設問に答えよ。(百点)

昔、中納言和田麿ときこゆる人おはしけり。その末に余五太夫といふ兵ありけり。年ごろ三輪の市のかたはらに城を(こ)かまへて、よそほひ(1)て住みけるほどに、敵にせめられて、城もやぶれ兵もことごとくうち失はれぬ。からうじて身一つ命ばかり生きて、長谷寺の奥にこもり居にけり。敵あさりもとめけれども、深く用意して、笠置ときこゆる山寺の岩屋のありけるにかくれて、二三日ありけるほどに、岩屋のほとりに、寺蜘蛛といふ蜘蛛のいをかきたりけるに、大きな蜂(はち)のかかりたりけるを、蜘蛛のいを巻きかけて巻きころさむとしけるとき(あは)憐れみをおこして、とりはなちて蜂に言ひけるやうは、「(こ)生有る物は命にすぎたるものなし。前世の戒力すくなくて、畜生と生まれたれど、命をしむころは人にかはらじ。恩をおもくすることは同じかるべし。我れ敵にせめられて(2)目を見る。身をつみて汝が命をたすけむ。かならずおもひしれ。」と言ひてはなちつ。その夜の夢に柿(かき)の水干(すいかん)・袴(はかま)きたるをとこ来て言ふやう、「昼の仰せ、ことごとく耳にとどまりて侍り。御心ざし、まことにかたじけなし。我れ、拙(つたな)き身をうけたりといへども、いかでかその恩をしらざらむ。願はくは、申さむままに(こ)かまへ給へ。きみの敵を滅ぼして奉らむ。」と言ふ。「誰がかくはのたまふぞ。」と言へば、「昼、蜘蛛のいにかかりて候ひつる蜂は、おのれにはべる。」と言ふ。(3)ながら、「いかにして敵はうつべきぞ。我が身にしたがひたりしものどもも、十が九はほろびうせぬ。城もなし。(こ)すべてたちあふべきかたもなし。」と言へば、「それは何かはのたまふ。残りたるものども侍らむ。二三十人ばかりを(こ)かまへてかたらひ集めたまへ。この後ろの山に蜂の巢四五十ばかり有り。これもみな我が(こ)同心なる物なり。かたらひあつめて(こ)力をくはへ奉らむに、などかうちたまはざらむ。但、その軍(いくさ)したまはむ日は、な寄せたまひそ。もとの城のほどに仮屋をつくりて、そこになりひきこ(こ)壺(つぼ)・瓶子(びんじ)やうのものを多く置きたまへ。やうやうまかりつどはむずれば、そこに隠れをらむずるためなり。しかしか。その日よからむ。」とちぎりにて去ぬと思ふほどに夢さめぬ。(こ)うけることなれど、いみじくあはれにおぼえて、夜にかくれ、(こ)ふる

さどへ出でて、ここかしこに隠れたるものどもに語りて言ふ、「我れ、生けりとても、かひなし。最後に矢一つ射て死なばやと思ふ。弓矢の道、さのみこそあれ。おのおのともなへ。」と言ひければ、「まことにしかるべきこと。」とて、五十人ばかり出でにけり。仮屋造りて、ありし夢のままにしつらひければ、「これは何のためぞ。」とあやしみければ、「さるゆゑあり。」とて、しつらひおきつ。その朝、ほのぼのと明けはなるほどより、山の奥のかたより、大きな蜂、一二百・二三百うち群れて、いくらともなく入り集まるさま、いと「**①**気むづかしく見えけり。日さし出づるほどに、敵のもとへ、「**②**これなむ侍る。いそぎ見参すべし。」と言へりければ、敵よろこびて、「尋ね失ひて、**③**ずおぼえつるに、いみじき幸ひかな。」とて、三百騎ばかりにてうち出でたり。勢ひくらぶるに、もののかずならねば、あなづりて、いつしかかけくむほどに、蜂ども、仮屋より雲霞のごとく涌き出でて、敵一人に二三十・四五十とりつき、目鼻ともわかず、物の具のあきまをさしつめけり。手足・ふところにも入りつつ、「**④**はたらく所ごとにさしそんぜずといふことなし。うちこそせども、三四十ばかりこそ死にすれ。敵にあふまでは、思ひよらず、今は目をふさぎ、うそをふきて、あきまをさされじとあわてさわぐほどに、弓矢のゆくへも知らず。かかりければ、思ふさまにはせめぐりて、敵三百余騎、時のほどにたやすくうちころされてければ、思ひなくもとのあとに帰り居にけり。死にたる蜂の少々ありけるをば、笠置の後ろの山に埋めて、上に堂たてなどして、年ごとに蜂の忌日とて恩を報じけり。子孫の**⑤**なかりける後には、この寺をば、敵の孫にてありける法師の、「祖父の敵になりける蜂の「**⑥**ゆくへなり。」とて、焼き失ひてければ、いみじき鳥潜をこのものなりとて、奈良うちはらはれてけるとぞ。すべて蜂短小のものなれども、仁智の心ありと言へり。

(『十訓抄』より)

問一 空欄①～⑤には形容詞が入る。次の語群から最適のものを選び、適切な活用形に改めて示せ。

あやし　　やすし　　からし　　はかばかし　　いかめし

問二 傍線部(i)「ふるさと」を具体的に言い表わした部分が本文中にあるか。あれば、その部分を抜き出せ。

問三 傍線部(h)「うけること」、(j)「気むづかしく」、(l)「うそをふきて」、(m)「ゆくへ」は、それぞれどういう意味か、わかりやすく説明せよ。

問四 傍線部(a)・(c)・(e)の「かまふ」と(d)・(n)の「すべて」のそれぞれは、どんな意味で用いられているか。適切な現代語に言い換えた上で、簡潔に説明せよ。

問五 傍線部(f)「同心」は、『周易』に見える次の漢文にもとづくものである。次の漢文を(1)訓み下し、(2)現代語に訳せ。

二人同心、其利断金。同心之言、其臭如蘭。

問六 傍線部(b)・(g)・(k)を正確な現代語に訳せ。

次の文を読んで、あとの問に答えよ。

いつのころにやありけん。あき人の家に、ぬす人いりて、あるじのいねたるうへに、馬のりにして、刀をむねにあてて、「たからある所教へよ、さらずばころさん」といふ。あるじのをのこ目うちさまし、つらくぬす人の顔を見て、⁽¹⁾さてまなこゐのけなげさよ。ころされんがかなしとて、物あたへんや。あらためてことわざすべくば、物とらせん。さらずば力なし、とくころせ」といふさま、ものとも思ひたらぬまなござしに、ぬす人とびしぞきて、はらくとなみだおとして、「ありがたき教へかな。さるにてもおそろしのとや、いくそばくの人をおさへたるに、かかるや有し。又かうやうのみじきことば、きける事なし。今よりきはやかにあらためてん」とて、かしらをふせて、あふぎ見ず。⁽²⁾をのこおきいで、かねとらせて、「誠にをのこなるは。さらばゆけ」といへば、かねおしかへして、「おのれにたらぬことなし。ただひきゆるものどもの、百にあまれるに、物とらせん料にすなる」とて、やがてまかりいでぬ。あけの日暮に、いづこともなく、ふくろに物いれて、文をそへて、あるじのとのに奉れとて、なげ入てにげたる者あり。⁽³⁾あるじ文をみるに、「思ひがけぬありがたき教へ、身にしみて覚え奉る。ことわざせんと約しつるが、ひきゆるものどもがかなしがるにつきて、又こそわるわざ仕るなれ。はてはおほやけのあみにもることなし。つみなはれんあとにて、後のわざしてたまはれ。おそれみ奉れど、一夜のたいめに、御心をもしり、心をもみせ奉るを契りにては申なり。其料に」とて、こがねそこばく、ふくろにいれたり。年へて後かのぬす人、かまいりにせられける。あるじ便なう覚えて、聞えしごとく、⁽⁴⁾かのかねをもて、あとよくとぶらひ、残れるかねを、遠きをおふとぶらひの料として、必忘るなど、子に孫に、いひおけるよし、はるかに年へてのち、ぬす人の百年忌とて、僧をむかへて、ついふくして、人に物とらせなどせし人、其子孫なるよし。ぬす人は名だかき石川といふものにて、あるじのところは、五条あたりとかつたふ。

問一 傍線部(1)の「あるじ」のことば全体を現代語訳せよ。

問二 傍線部(2)の「あるじ」の行為とことばは、「ぬす人」のどのような態度をどのように評価してのものなのか、説明せよ。(解答欄 14センチ×4センチ)

問三 傍線部(3)の「あるじ」が見た「文」の内容を的確に要約せよ。(解答欄 14センチ×5センチ)

問四 傍線部(4)の「かのかね」の使いみちを説明せよ。(解答欄 14センチ×3センチ)

次の文章は、鎌倉時代の紀行文学『東関紀行』の一節である。これを読んで、問一～六に答えよ。

曙の空になりて、瀬田の長橋うち渡すほどに、湖はるかにあらはれて、かの(註)満誓沙弥(まんせいしゃみ)が比叡山にて此のうみを望みつゝ(一)よめりけん歌おもひ出でられて、漕ぎゆく舟のあとのしら波、まことにはかなく心ぼそし。

世の中を漕ぎゆく舟によそへつゝながめし跡をまたぞながむる

このほどをも行きすぎて、野路(のぢ)といふ所にいたりぬ。草の原露しげくして、旅衣いつしか(二)袖のしづくところせし。

(あづまぢ)東路の野路の朝露けふやさはたもとにかゝるはじめなるらん

篠原(しのはら)といふ所をみれば、西東へ遙かにながき堤あり。北には里人住みかをしめ、南には池のおもて遠く見えわたる。むかひの汀(みぎは)、みどりふかき松のむらだち、波の色もひとつになり、南山の影をひたさねども、青くして漚瀆たり。洲崎とこころどころに入りちがひて、(三)あし、かつみなどおひわたれる中に、をし、かものうちむれて、とびちがふさま、(註)あし(註)を書けるやうなり。都をたつ旅人、この宿に(四)こそとまりけるが、今はうちすぐるたぐひのみ多くして、(五)家居(註)もまばらになりゆくなど聞くこそ、変りゆく世のならひ、(註)飛鳥の川の淵瀬にはかぎらざりけりとおぼゆれ。

行く人もとまらぬ里となりしより荒れのみまさる野路の篠原

(注)○満誓沙弥——奈良時代の僧、筑紫観世音寺の住職となった。『万葉集』に短歌七首を残している。なかでも、左記の一首は平安時代以後の文学に大きな影響を与えた。この『東関紀行』の一節も、その一例である。『拾遺集』には第三句以下を「朝ぼらけ漕ぎゆく船の跡のしら波」とする。

(よのなか)世間を何に譬へむ朝びらき漕ぎ去にし船の跡なきがごと(卷三・三五一)

○あしで——平安時代に行われた書体の一つ。葦、水流、鳥、石など水辺の光景の中に、文字を絵画化し、歌を散らし書きにして書きませた。藤原伊行筆「蘆手絵和漢朗詠抄」(国定)が代表的である。

○飛鳥の川の淵瀬——世の中はなにかつねなる飛鳥川きのふの淵ぞけふは瀬になる(『古今集』卷十八・九三三)

問一 傍線部(1)(2)(3)をわかりやすく現代語に改めよ。

問二 傍線部(4)の係助詞「こそ」の結び方はどうなっているか。ここでそのようなになっている事情を説明せよ。

問三 傍線部(5)の「家居」をどう読むか。歴史的かなづかいによってしるせ。

問四 本文全体をおおっている情調の根底にある世界観は、なんと呼ばれるか。漢字でしるせ。

問五 鎌倉時代にはいると、『海道記』『東関紀行』『十六夜日記』などの紀行文学が発達した。その理由としては、どのようなことが考えられるか。四十字以内でしるせ。

問六 波線部「南山の影をひたさねども、青くしてくわうやう滉瀼たり」は、左に掲げる白居易の作品「昆明春」の句「影は南山を浸し青くしていんりん滉瀼たり」を下敷きとした表現である。これについて問A、問Bに答えよ。(一部返り点、送り仮名を省いてある)

昆明、春、昆明、春

春池、岸、古、春、流、新

影、浸、南山、青、滉、瀼

波、沈、西、日、紅、淵、淪(以下省略)

(注)○昆明——長安の西南にある昆明池のこと。○南山——長安の南にある終南山をさす。

○滉瀼——水の深く広いさま。○淵淪——深く広い水にさざなみの立つさま。

問 A 「影浸南山」の訳文として適切であると思うものを、左記の①～⑥からすべて選べ。番号で答えること。

- ① 池の周囲の影が南山の姿にまぎれて、
- ② 池の周囲の影が南山の影にまぎれて、
- ③ 池にうつる影が南山にしみわたってゆき、
- ④ 池にうつる影は南山の姿であり、
- ⑤ 影、それは南山が水にひたっているものであって、
- ⑤ 池の周囲の影が南山をひたして、

問 B 傍線部を書き下し文に改めよ。

〈第一講〉

『はいずみ』

〈解答〉(一) (ア) (懇意な人の娘の所に)人目を忍んでこっそりと通い続けた。

(イ) 長年連れ添った妻をあなたは持ちなさっているけれども、(わが娘に通い始めてしまわれたからに

は)今さらどうしようか、いやどうにもならない。

(二) 家に妻を置いている男が、たとえ新しい妻を愛していると言っても、やはり長年連れ添った妻を捨てがたく思うだろうという世間の噂に同感だ
と「う」こと。

(三) 自分たちの娘をせめて男の自宅に迎え入れることだけは今すぐ実行してほしいということ。

(四) 長年連れ添った、自宅に置いている妻をどこへ行かせようか。

〈第二講〉

□ 『竜鳴抄』

(一)(イ)決して決して

(ウ)音楽の道に器量(才能)が十分あるような人に対しては、その伝授を惜しんではならない。

(オ)他人にはあまり上手ではなく演奏させて

(二)音楽の道は代償を得るものではなく、それを楽しみめばよいものだから、たとえ執着しても地獄に墮おちるようなことはないということ。

(三)音楽を演奏して、その音色から極楽浄土を連想し、往生を願うならば、ということ。

□ 『十訓抄』

(二) かれ〳芸道の家に生まれた人。これ〳芸道の家には生まれながその道を志す人。

(二)(イ) ちよつとした、仲間同士の遊興(でも)

(ウ) その品位もその容貌の美しさも必ず自然と軽んぜずにはいられないものである。

(エ) 色あせて見えるけれども

(三) 桃李Ⅱ高貴な身分や容貌の美しさ

松樹Ⅱみがきぬかれた芸能の技

(四) 道々の才芸において父祖の技を超えること。

〈第三講〉

□ 『多武峰少将物語』

(一) 高光の少将の君は、ひたすら出家のことばかりを御心の中で自然お急ぎになり続けなくてほいられなくて

(二)(イ) 女君は、「いつものことですね」と、冗談だとお思いになって

(ウ) どうかあまり深く思いつめないでください。私はあなたのことを決して忘れはしません。

(三) どうして家の中にお上がりになることができないのですか。

□ 『玉勝間』

(二) (イ) 論評をすることは

(ウ) 度量が広く、おおらかであつて

(エ) 世間一般の人の気持ちであるようだけれど

(カ) 自然と非難しないではいられない

(二) ある特定の学説だけに固執しないこと。

(三) 自分がより所にし、正しいと固く信じている学説。

(四) 自分の信じる学説を根拠に他説を非難することは、学問に対する誠実さの表れであるから。

〈第四講〉

『源氏物語』

(二)(ア) 豪族が姫君を逃がすまいという気持ちできつと追いかけて来るだろう

(ウ) 残してきたという妻や子は、今ごろどうなってしまうているのだろうか

(二) 豪族の追跡の恐ろしさに比へれば、航行の難所越えなどたいしたものではないという気持ち。

(三) いとしい妻子の身の危険を考慮せず、無分別にも九州に置き去りにして出奔してきたこと。

〈第五講〉

『増鏡』

(二) (ア) 姫君(倍子)は、上品でつややかな美しさに満ちあふれていて、かわらしくお見えになる。

(ウ) 中納言(公宗)は、感動のあまり、かえって落ち着いて聞くこともできず

(二) だれもが何となく気がおけてしまうほどに、中納言の容姿人柄が立派だということ。

(三) 中納言が、妹倍子への恋心を悟られまいという気持ちで、浮かびそうになる涙をおさえ平静を装った。

(四) 世間並みの美しさの子供であっても、親というものは、この上もなくかわいらしいと思うものだということ。

〈第一講〉

『唐物語』

(一)(ア)どうしようもなかったけれど

(イ)たいそう気に入らないありさまだと思い込んで

(ウ)少しも心配だと思わないで、長い年月を過ごした

(二)蜀の国で立身出世して、大きな車や肥えた馬に乗れるほどの身分にならない限り、故郷には戻るまいと決心したということ。

(三)天に昇って仙人になるという意の名を持つ橋の柱に、裕福になろうという決意を書き付けたことが、立身出世のきっかけになったということ。

〈第二講〉

『住吉物語』

《解答》

問一 (1)高貴な女性が、横を向いて座っている。

(2)あなたのいらっしゃる場所を、お教えください。

問二 (A)あなたはどこにいらっしゃって、私にこんなつらい目をお見せになるのですか。あなたが行方知れずで私がどれほど嘆いているかわかっていらっしゃいますか。「別解」あなたはどこにいらっしゃるのですか。そのおかげで私にこんなつらい目をお見せになっているのですよ。(以下同じ)

(B)お告げを受けたので、そのお告げどおりにするつもりだ。私にはとくに、思うことがある。お前たちは私の言うとおりにしなさい。お前たちがたとえ何と言っても、連れていくつもりはないぞ。

問三 私の住んでいるのは、海の底とも、どこそこだともわからないような海辺の場所で、そこでつらい暮らしを送っておりますが、漁師はそこを「住みよい所だ」などと言うのですよ。そうです、私は今住吉におります。

問四 姫君が立ち去ろうとするのを自分が袖を引きとめて帰さないでいると夢に見て、中将は目を覚まして、もし姫君と会っているのが夢だと知っていたなら、目覚めないでいたのになあ、と思つて悲しかった。

〈第三講〉

『芭蕉翁頭陀物語』

- (二) (ア)あなた方が私の家に盗みに入ったのを世間の人に知られないことを財宝の代わりとし
- (イ) 本当に表から見た様子と家の中とは、貧富が黄金と瓦のようかけ離れている。
- (ウ) 草庵に放火して、あなたにこの俳句を詠ませるきっかけを作った悪人は
- (エ) 俳句を作ること苦楽の心を楽しませる者を風流人という。
- (二) 盗人を休息させたことが世に知られ、自分もとがめを受けるのではないかということ。
- (三) 雪の上に残った盗人の足跡。

〈第四講〉

『百首異見』

- (一) 門を開けるわずかな間さえ、立ちくたびれたとおっしゃる。
- (二) 兼家の途絶えがちな訪れへの恨みを、機会をのがさず詠んだ歌ということ。
- (三) 門を開けるまでの短い時間でさえ立ちくたびれたとつっしゃるあなたには、あなたの不誠実さを嘆きながら独り寝る夜が明けるまでの時間が、
どんなに長いものかわかりにならないでしょうね。

〈第五講〉

『源氏物語』濔標

《解答》

- 問一 (ア)気の毒な境遇で生まれたことよ。
 - (イ)実用的な贈り物もある。
 - (エ)たいそう誇らしいことだとしだいに思うようになった。
- 問二 行き着きぬ・思ひたちたまひね

問三 源氏の寵愛厚い明石の君にひき比べ、我が身の不運を嘆くが、源氏の自分への気遣いを知って慰められている。(五十字)
問四 海松・なごり・鶴

〈第六講〉

《出典》本居宣長「玉勝間」(巻六)

【解答】

問一 (1)何であれ、はるかな昔のものを、そう古くない時期に訪ね求めてもわからなくなってしまったのを、今の世になって訪ね、ここだと定めることは、たいていの場合、簡単ではないことであるなあ。

(2)よその土地にいてははつきりしないことも、その国では何といってもやはり書き伝えもし、語り伝えもして、間違いのないこともある。
(3)こここそは昔の名所かと目が留まるものであるけれど、それもまたすぐにはあてにできないものである。

問二 古い昔の話を、土地の人があまりにも確かに知っているような顔で語るの、書物を読みかじって生半可に考察し、自分の小賢しい心で、勝手に決めてしまっている場合が多く、うのみにするとかえって損になるので、そのまま信用してはならない。

人は、名所が、本当はよその土地のことでも、無理に地元もことだとして自慢したがわるものであり、ちよつと関連のありそうなことを拡大解釈したり、勝手に目印の碑などを作っている場合が多いものだから、それらに惑わされてはいけない。

賤しい男が語る、興味をひかれるような話は、昔生半可の物知り人などが訪ねて来て、ここが名所の跡だなどと間違つて教えておいたものを里人がすっかり信じ、子孫などに語り伝えている場合もあるので、そのまま信用してはいけない。

これらの例のように、後の世の人が自分勝手にこしらえた物が多いので、よくよく心して、いかにももつともらしいことでも、そのまま信用してはならない、ということ。

問三 場所の様子が神々しく、木立が茂り、古めかしい感じになっているのを見ると、こここそ昔の名所の跡と目が留まるが、古めいた森や林などはどこにでも多くあり、木立などは二、三百年経ちさえすれば古めかしく見えるものなので、古く見えることに惑わされて名所の跡だと断定してはならない、ということ。

〈第七講〉

《出典》三浦梅園『梅園拾葉』

【解答】

問一 (1)花桶に生けておく花の量を自分は気にもとめず、作法を心得ない子供や木こりが採って来るのにも任せたままにしているということ。

(2) 色あせた花でも、盛りの頃の美しさが偲ばれるものには、盛りの頃と同じように趣があるのは言うまでもないということ。

(3) 古い花が枯れたりしおれたりしたところに、摘んできたばかりの新しい花を生け足してあるので、他人の目にはさぞ感じが悪く見えたりするだろうということ。

(4) 桜の花が散ったあとは、わずかに残った水がなくなるまでのあとわずかな命とも知らず、哀れにも、青々とした若葉が緑を増しているという。

問二 摘み取ってきたままに何の手も加えず花桶につかみ挿した花々が、上を向くべきものが下を向き、低い所にあるべき花が高い位置にあるというように、それぞれ好き勝手に咲き乱れあつてこちらの思い通りにはならない様子が、同じようにままならぬ人の世のありさまそのままと重なつて見えて、興味を感じさせるということ。

問三 生け花の作法に従い、枝を曲げたり、花房や葉を取つたりし、また色あせるとすぐに無情に捨ててしまい、花の盛りだけを重んじるようなやり方を、自然のそのときどきのありのままの趣が感じられない、と残念に思っている。

〈第八講〉

『古今著聞集』

《解答》

問一 (ア) 殺すまいと思つて命中させてないので

(イ) 「もし宗任に義家を思い切つて殺すような気があるならどうであろうか」と首をひねつた(「どうであろうか」を「考えものだ」「まづいことになるのでは」などでも可)

(ウ) とんでもないことが起こりそうだ

(エ) 火をともしている人影から判断すると

問二 ささ(サ行四段動詞・未然) せ(使役助動詞・連用) 給ひ(ハ行四段尊敬補助動詞・連用) けり(過去助動詞・終止)

問三 「引目」の矢が飛ぶときに発する音の間隔の短さから。

問四 大胆(にしてかつ) 繊細

〈第九講〉

『古本説話集』

《解答》

問1 (ア)嫌いぬいて避け通すこともできず

(イ)到着したいものだ

(ウ)たいそう御同情なさって

(エ)世間で評判になった

問2 匡衡

問3 国守に任命されること。

問4 長年住吉の神を信仰してきたのだから、その効験を示して、息子である挙周の病気を治してほしいという願い。

〈第十講〉

『源氏物語・帚木』

《解答》

問一 下二段活用、謙譲

問二 (a)四段活用・「頼りにする」意。

(b)下二段活用・「頼りにさせる」意。

問三 をさなき者

問四 中将が、子供の方は二の次にして、一番愛しているお前の所へ頻繁に訪ねてくると、母親である女の機嫌をとったということ。

問五 「常夏」が「床」と「常夏」の、「秋」が「飽き」と「秋」の掛詞になっている。

問六 この女性は、たまにしか来ない中将をうらみもせず心から信頼していた。それに対して中将は、いとしいと思いつつも女性性の優しさに安心してついつい放つたらかしたあげく、女を行方知れずにしてしまった点。(九十九字)

〈第十一講〉

《出典》『栄花物語』〈巻第十六 もとのしづく〉

【解答】

問一 (1)今は亡き四条の宮がたいそうかわいいものに思い申し上げていらっしやったのに

(2) どうして並みひととおりのこととお思いになるはずがあるうか

(3) 四条の宮のありとあらゆる財産で、そっくりそのままこの姫宮にお譲り申し上げていらっしやったものも、四条大納言は、この姫宮の葬送や法事に当てようと、格別の御配慮をなさった。

問二 (イ) 四条大納言も尼上も姫宮の病気の平癒を願ってあらゆる折りなどの手を尽くしたが、そのかいもなく、ということ。

(ロ) 弁の君も妹の姫宮の死をたいそう悲願したが、かといっていつまでも嘆き悲しんでばかりもいられないと思って、ということ。

問三 (A) 「櫛でとかすとはかなくもこのように抜け落ちてしまう」と姫宮が嘆いていた長い黒髪が、今となつては、姫宮との永遠の別れの形見となつてしまったのですね。

(B) この数珠の玉を死に別れた姫宮に代わるものとして見たいものです。姫宮の魂は帰らないとしても、こうして時がたつてから帰ってくる玉もあるのですねえ。

〈第十二講〉

『今鏡』「藤波の上」(途中省略あり)

《解答》

問一 (A) はやく、大殿にふさわしいおもてなしをしてさしあげよ。

(B) わざわざあらかじめ準備してあったようであった。

問二 面白がる・困らせたい

問三 驚嘆する・冷やかす

問四 ・もてなすための道具を取りに行くこと、美しく積もっている雪を踏み荒すことになり、せつかくの雪景色を台なしにしてしまうから。

・もてなしの道具を取り出すのに時間がかかり、大殿を待たせることになるから。

問五 賓客の突然の来訪(八字)

〈予備問題〉

□ 《出典》 鴨長明『発心集』

【解答】

問一 (1) わざわざ山奥に隠遁し修行しようと望むこともなかった。

(2) 物を借りた人もかえって、仏の者を借りたのだからと思つて、約束を違えて返さないというようなことは少しもしなかった。

(3) 世間の予想に反して意外にも、永観が東大寺の別当になることを辞退し申し上げることにはなかった。

(4) 東大寺に在る間に必要なだけの費用を

(5) 白河院は、永観の辞職の申し出に対して、別段あれこれと慰留のお言葉もなく、別人を東大寺の別当に任命なさった。

問二 現世的な名譽や利得などにはまったく無関心で、ひたすら念仏修行に専念している永観律師のことだから、いまさら東大寺の別当職というような高い地位につくことなど、当然辞退するものと予想していたから。

問三 地位と名声を利用してほしいままに私腹を肥やすことも可能な東大寺別当の職についても、無欲な立場で東大寺の修復作業に専念しうるのは永観律師以外にはいないと白河院は判断し、永観の方もそうした院の意向を心得て、私欲などにまったく惑わされることもなく三年のうちに修復を成し遂げた。白河院と永観律師が暗黙のうちに示し合わせたようなことの成り行きを見た当時の人々は、院の人を見る目の確かさと律師の道心の深さに対して、さらに尊崇の念を深めたということを、「時の人」の言葉は示している。

□ 『太平記』〈巻第三 笠置軍事〉

《解答》

問1 (ア)比叡山延暦寺の多くの僧兵たち。(イ)開戦の合図として敵味方の双方から矢を射かわすこと。(ウ)功名を得るためにひそかに陣を抜け出して敵に攻め入ること。(エ)衰えた形勢をもりかえず力。(オ)数知れぬほど多い。

問2 ラ行変格活用動詞

推量の助動詞

推量の助動詞

「有り」の未然形

「ん(む)ず」の終止形

「らん(む)」の連体形

有ら

んず

らん

問3 どうして討って攻めないはずがあるのか。当然攻めかかる。

問4 (I)木津川の多くの瀬の岩に波立てて流れる水の勢いが急なので架けた高い橋がすぐに落ちるように、攻めてもすぐに逃走していく高橋であることよ。

(II)高橋に続いて小早川の軍勢も無様に敗走した様子を、「かけ」「落ち」「うき」「川」などの掛詞や、「水」「うき」「流す」などの縁語を用いて巧みに一首の歌の中に詠み込んで、嘲笑した面白さ。

第一講

〈解答〉

問一 解釈参照

問二 解釈参照

問三 帥殿のほつとした様子が見てとれたから。(十九字)

問四 心広く包容力があり、善意を持って人々に対処するような人物。

問五 「帥殿のかたより便なきことあるべし」という噂

問六 二人とも

問七 今鏡・水鏡・増鏡

〈口語訳〉

道長公が御嶽に御参詣なされた途中、「伊周殿の方から道長公に不都合な企てがあるだろう」と噂されて、道長公はいつもより身边を警戒なされて、無事に御帰京なされた。伊周殿も、「このようなことが噂されていた」と人々が申し上げるので、とても心外なことにお思いになられたが、そうかといってそのまましておくことはできないので、道長公のところに参上なされた。道長公が御嶽参りの道中のいろいろな話をなされる時に、伊周殿がひどくおどおどなさっている御様子がはつきりと認められるのを、おかしく、またそうはいうもののやはり気の毒にもお思いになられて、「長い間双六のお相手をし申し上げずに、たいへんもの足りないもので、今日双六をなさいます」と言って、双六の盤をお取り寄せになって、それをお拭きなされると、伊周殿の御様子がこのうえなく直って見られなされるので、道長公をはじめとして参上なされている人々は、しみじみと愛おしく見申し上げ

た。あのような伊周殿の陰謀の噂をお聞きになった様な場合には、少し冷たくお取り扱いなさるのが当然であるけれど、道長公は、どこまでも情愛深くいらっしやる御性質で、きつと普通の人ならば信じているようなことでも、反対に、親しみ深くお取り扱いなさるのである。この御博奕の双六は、打つことに夢中になりなされたので、道長公も伊周殿もお二人とも裸におなりなされ腰のあたりに衣服を巻きつかせなされて、夜半・夜明けまで双六をおやりなさる。「伊周殿は心が幼稚でいらっしやる人で、不都合なことが起こったらたいへんだ」と道長公の方の人々は伊周殿と勝負ごとをなさることに賛成し申し上げなかつた。双六にはすばらしい御賭物が数々ありました。伊周殿は、古い何ともいえない立派な品々、道長公は新しい興趣のある品々を、風流な様子に仕立てて、互いに取ったり取られたりなさつたけれど、このような遊びごとまでも、伊周殿はいつも負け申し上げなされてお帰りになされた。

第二講

『落窪物語』

《解答》

問一 (イ)女君の様子を見にこつそりといらっしゃった

(オ)また縫うのが遅くなると困る

(ク)今すぐ死んでしまえたらなあ

問二 近くで話せというおとどの言葉に従って、北の方はおとどの方に戻っていったため、北の方のおとどへの返事も女君達から遠くになったから。

問三 (ア)女君(女) (ウ)継母(北の方) (カ)実父(おとど)

問四

	品詞	終止形	活用形	意味
(キ)	助動詞	る	連用形	受身
(ケ)	助動詞	り	命令形	存続

問五 「落窪の君」を、前半では別の人と考え、名前や北の方の態度からその人のことを悪く言ったが、後半では女君のことだとわかり、気の毒に思い、悪く言ったことを後悔し、女君を立派に引き立ててやりたいと思っただ。(九十八字)

《全訳》

(日が暮れて)暗くなってしまうので、格子を下ろさせ、燈台に灯をともさせて、「何とかして縫い上げよ

う」と思っているときに、北の方が、「縫っているか」と思って(様子を見にこっそり覗き込んで)「縫っているか」と思っていると、縫物は散らかして、灯はともして人もいない。「(女君は几帳の中に)入って横になってしまった」と(北の方は)思うと、大いに腹が立って、「お殿様、この落窪の君は性格にかわいげがなくてもあましかったです。こちらにいらっしやってお叱りください。これほど急いでいるのに。どこにあった几帳であろうか、使い慣れぬ物を用意して、突っ立てて、入って寝てばかりしていることよ」とおっしゃると、おとどは、「近くにいらっしやってお話しなさい」とおっしゃるので、(北の方は)おとどの近くに去ったので、北の方の返事は遠くなってしまう、最後の方の言葉は聞こえない。少将は、(女君の名が)「落窪の君」だとは聞いていなかったもので、「何の名前か、落窪とは」と言うので、女君はたいそう恥ずかしくて、「さあわかりません」と答える。「人の名前になんで(落窪などと)つけたのか。きっとふさぎこんでいる人の名前であろう。ぱっとしない人の名前である。北の方が(その人を)いじめまくっているのだ。(その人は)きっと性格がひねくれていらっしやるのだろう」と言っただけで横になっていらっしやる。

袍を裁断して寄こしてきた。「また縫うのが遅くなると困る」と(北の方は)お思いになって、あれこれと、おとどに申し上げて、「(女君の所に)行って(しっかりと)おっしゃってください」と(おとどは)責められて、いらっしやると、遣戸を引きあけなされるとすぐにおっしゃるには、「いやまあ、この落窪の君が、あちらがおっしゃることには従わず、けしからぬというのは、どうしてか。(実の)母親がいらないようなのだから、『なんとかして悪くなく思われたい』とこそ、思うがよい。これほど急ぐのに、他の物を縫って、うちの物に手を触れないのは、どういふつもりか」と言っただけで、うちの物に手を触れないのは、どういふつもりか」と言っただけで、「夜のうちに、縫い上げないなら、(おまえを)我が子とは思えない」とおっしゃるので、女君は返事もしないで、ほろほろと泣いてしまった。おとどは、そのように言葉をかけてお戻りになった。少将が聞くのが恥ずかしくて、「このうえない恥のように(北の方から)言われ、(少将も)言った(落窪の君という)名前を私のことだと聞かれてしまったこと

よ」と思うと、「今すぐ死んでしまえたらなあ」と縫物はしばらく(わきに)押しやって、灯の暗い方に向いて、たいそう泣くので、少将はあわれで(泣くのも)もつともだと思ひ、「どれほど、本当に恥ずかしいと思つてゐるだろう」と、自分も泣いて、「しばらく(几帳の中に)入つて横になつていらつしやい」と言つて、無理に引き入れなさつて、あれこれと言葉をかけ慰める。「落窪の君とは、この人の名を言ったのだなあ。私が、(先程あれこれ)言つたことを、どれほど恥ずかしいと思つてゐるだろう」と思うと氣の毒である。「継母はともかく、(実父である)中納言までもが(この人に対して)憎いことを言つたものだなあ。(この人を)たいそう憎く思つてゐるよ。うだ。なんとかして、(この人を)立派にして見せてやりたいなあ」と心のうちでお思ひになる。

第三講

〈解答〉

問一（a）あれほどの（短絡的な判断をしがちな）基俊も梨壺の五人に対して、畏敬の思いを抱きなさるだろうよ。

（b）長明ほどの世俗とのしがらみのないすぐれた世捨て人であっても、真実の人格者ではないので、同じ道を追究する者同士が妬みあう心根はなくなっていないと思われる。

問二 枝の、あるいは、現代語Ⅱで

問三 歌や歌集に精通しているはずの基俊ほどの歌人が、『後撰集』所収の歌と知らずに一方的に非難したことは、基俊がじつは歌にも歌集にも精通していないことを証明することになるから。

問四 秀歌といふ物あるにつきて、よからぬ歌もありと知るべし。

問五（ア）秀れた歌とともに劣った歌も収めることにより、歌の優劣を比べることもでき、秀れた歌の価値が高まることになる。（五三字）

（イ）俊頼の子の俊恵が鴨長明の師で、俊頼は基俊と同じ時代に名匠と称された。長明がいわば俊頼の孫弟子にあたるため、俊頼とライバル関係にあった基俊の難点ばかりを長明が自著に採り上げているのは、歌人を公平かつ客観的に分析しているとはいいい難いものであるから。（一二二字）

〈現代語訳〉

藤原基俊が（中途半端に）歌を見知っていらっしやるのを憎み、とある腹黒い者が、『後撰集』の所収のあまり出来のよくない歌で、人に知られぬ歌を、自分が詠んだ歌に書き混ぜて、（基俊に）見せたのを、（基俊は）何の疑

いもなく批判して、返されたので、その腹黒い者は喜び、手をたたき、「基俊は（『後撰集』の撰者たち）梨壺の五人よりも歌を撰ぶ能力がすぐれている。（基俊は）『後撰集』の所収の歌を非難した」と言つて、世間に非難の噂を流して回つたと、『無名抄』に鴨長明がお載せになっている。この腹黒い者よりも、鴨長明の心根が浅ましく、また歌道の真理を知らないように思われて、かえって恥をかかれていますのである。例えば、一つの歌集に収録する歌を撰ぶのは、立花「花や樹を瓶に挿して山水の様子を表現する技芸」のようなものだ。花を瓶に挿すといつても、花だけを挿すのではない。何という趣もない草木の枝で、ある枝は細く太い、またある枝は長く短い、そういう枝を、それぞれに配置して用いると言っている。その立花をばらばらにして、花が咲いていない枯れ木の上枝などだけを、一本二本ずつ持つて、これも花瓶から出ているからということ、花に見立てるようなものだ。『後撰集』の所収の歌だからといって皆すぐれた歌であろうと決めつけるのは、まずその者の誤つた考えである。すぐれた歌というものがあるとともに、劣つた歌もあると知るのがよい。そもそも、『古今集』全体は一世界を表し、人の一生涯を示現すると言っている。いずれの歌集もみなそれぞれ同様である。藤原公任が『和歌九品』をお撰びになつた時にも、最上レベルの歌にも、最低レベルの歌にも、柿本人麻呂の御歌が含まれているではないか。だから、人麻呂や山部赤人の歌にも、屑のような歌があると知るのがよい。俊成卿が『千載集』をお撰びになつた時にも、（俊成が）「私は人を見ない。ただ歌だけを見る」とおっしゃつたのも、これと同じ趣旨である。あれほどの（短絡的な判断をしがちな）基俊も梨壺の五人に対して、畏敬の思いを抱きなさるだろうよ。その基俊が非難した歌を見たら、それは必ず最低レベルの歌であるに違いない。大変道理にかなつていない、（本来は）褒めるべきなのに、かえつて誤つてると、現在に至るまでそういう評価が続いているのは、歌道に精通していないからである。歌道は非常に深い秘伝がある故に、どの時代にも（歌道の本質を）知る人は少ない。（歌道の本質を）知る人が少ないので、何の罪もない基俊を、罪人のように扱つているのである。そもそも、この『無名抄』を見ると、基俊が誤っている事例を数多くお載せになっている。その下心は、俊成卿の威勢をね

たんで、その俊成卿の師匠（といわれる基俊）を軽侮されているように（私には）思われるのである。長明ほどの世俗とのしがらみのないすぐれた世捨て人であっても、真実の人格者ではないので、同じ道を追究する者同士が妬みあう心根はなくなっていないと思われる。長明は源俊恵の弟子である。俊恵は俊頼の子である。俊頼と基俊とは、同じ時代の名匠である。「両雄は必ず争う」「力が匹敵する二人の英雄が同じ時代に現れると、必ず争いが起こり、どちらかが倒れる」というのがこの世の常であるので、互いにその非を見つけては非難なさったと（各書に）見えている。

第四講

〈解答〉

問一 地位や身分の高い人の作品を重んじ、男性中心の、それほどよいと思われない歌が多く選ばれている点。

問二 女(女性)

問三 物語の多くは女性の手によって作られたものであるから。

問四 ①女性がまだ勅撰集の撰者となった例がないこと。

②自分が世間にも認められず、後世に残るような作品も作らずに一生を終えてしまうこと。

問五 男性主体であり、女性はとりわけすぐれた歌でなければ撰ばれることがないと思っているから。

問六 人のまねをすることは絶対にいけないことだと、若い女房をたしなめるため。

問七 身分の高い人の姫君や奥方などのような、世間の人の目にふれることもなく、奥まった所で生活している人々。

〈全訳〉

甲 「ああ、機会を得て、三位入道(＝藤原俊成)のような身となって、勅撰集を撰びたいものですよ。『千載集』こそは、三位入道、その人の撰んだもので、たいへん奥ゆかしうございませうが、あまりに歌人たちに遠慮されたのでしょうか、それほどよいとも思えない歌々がたくさん入っているようです。何事もつまらなくなっていく末世に、この(和歌の)道だけは、絶えることもなく、尽きることもない、とかうかがっております。ほんとうに、(和歌について)よくわかっていない(私の)耳にもめつたにない(すぐれた)歌々がありますのに、歌の作者の地位に遠慮したり、その身分にかたよって評価した歌々とは一緒にせず、(すぐれた歌を)撰び出したならば、どん

なにかすばらしい(歌集となった)ことでしょう。それにしても、残念なことですけど、女ほど口惜しいものはないことです。昔から(女性で)情趣を愛し、(和歌の)道を学ぶ仲間はいくらでも、女性がまだ勅撰集などを撰ぶことがないのは、たいそう残念なことですよ」と言うのと、

乙 「必ずしも、勅撰集を撰ぶことがすばらしいというわけではないでしょう。紫式部が『源氏物語』を作り、清少納言が『枕草子』を書き集めたのははじめとして、前に申し上げたいいくつかの物語の、多くは女性の手に成ったものではございませんか。だから、(女性は)やはり捨てがたいものとして自分としては思いますよ」と言うのと、

甲 「それならば、どうして、(私が)後世に残るほどの(すばらしい作品)一篇、書き残すぐらいの(才能のある)身として生まれなかったのでしょうか。どなたかの姫君・奥方などとして(世間から)隠れがちにいるような人はそれでよいとして、(私のように)宮仕え人として人前にあらわに顔を出し、広く人に知られるほどの身をもって、『最近ではあの人こそ(第一人者だ)』などと人にも言われることもなく、(名を)後世までも書きとどめられることもない身として(一生を)終わってしまうのは、ほんとうに残念でならないことですよ。昔から、(男女あわせても、すぐれた歌は)どれほど多くの数があるでしょうか、そんなにたくさんはないでしょうけれど、つまらない下手な歌一首を詠んで、勅撰集に入ることなどさえ女性はたいそうむずかしいことのようにです。まして、後世まで名をとどめるほどの名歌を、詠み出し、作り出している例はほんの少ししか聞いておりません。(そういうことは)ほんとうに珍しいことですよ」などと言うと、

丙 例の若い女房が、「それにしても(そのような名を残した女性は)どういう人たちがいるのでしょうか。昔、今に關係なく、自然に(世間に)奥ゆかしいと評判になっているような人たちを思い出して、その中で、少しでもよいと思われるような人のまねをしたいものです」と言うのと、

甲 「ものまねは人のしてはいけないことですよ。淵(＝水底)に沈みなさってしまふことでしょう」と言って笑う。

第五講

〈解答〉

問一 ① 問二 解釈参照 問三 と 問四 解釈参照 問五 ④ 問六 (I)道済 (II)自分の歌の方が優れているとの大納言の判定を聞いて、大喜びして退出した人だから。

問七 凝った趣向や巧みな言葉遣いもさることながら、題材の性質にふさわしく表現することが大切である。

問八 ③

〈解釈〉

霰の降りしきる交野の御野で鷹狩をしていると、蓑を借りるのもむずかしく、また、ぬれないような雨宿りの場所を貸す人もいないので、狩りの衣はすっかりぬれてしまったことだ。

降りしきる雪にぬれながらも、もつと狩りをしながら先へ行こう。このはし鷹の上毛に降りかかる雪をうち払いながら。

この二首は源道済・藤原長能という歌人たちが鷹狩りを題として詠んだ歌である。ともに優れた歌であって、人々の評判になっていた。その後、それぞれが、我が歌こそ（優れている）と主張して、幾日もたってしまった

ところ、やはり二首のうちどちらの方が優れているか、今日は決着をつけようといって、一緒に連れ立って、四条大納言のもとに参上して「この二首の歌について、互いに（自分の作が優れている）と主張し合って、いまだに決着がつきません。どんなふうにでも判定していただきたいと思って、二人とも参上したのです」といったところ、四条大納言は、この二首の歌を、しきりに吟誦して考えてから、ほんとうのところを申し上げたとしても二人とも腹をお立てにならないでしょうね」と申されたので（二人は）「いつこうに、どのように仰せられようとも、腹が立つことはございません。その（優劣を決する）ために参上しましたので、早速（ご意見を）拝聴して、退出いたしましょう」と申し上げたので、四条大納言は「それでは（申し上げましょう）」といって、申されたことには、「交野のみののと詠んだ歌は、趣向をこらした詠みぶりも、言葉の使い方も、はるかに勝っているように感じられる。そうではあるが、いろいろな欠点があるのです。鷹狩りというものは、雨が降ってきたくらいのこと、鷹が降ってきたことくらいで、宿を借りて休むというのは、不自然なことです。霰などは、それほどに、狩りの衣が濡れ通って惜しいというほど（ぬれるもの）ではないでしょう。やはり、狩り行かむとお詠みになったのは、鷹狩りの本質的な姿も表され、実際にも、趣深かったであろうと感じられます。歌の品格も、優美で風情があります。勅集などにもこちらが入るのではないだろうか」と申されたので（ほめられた）道済は（大喜びして）舞い踊るように帰って行ったということだ。

〈第一講〉

《出典》『唐物語』

【解答】

問一 (1)私(女)もあなた(朱買臣)も、互いに夫婦の仲を絶って、別々に人生をやり直してみましよう。

(2)私(朱買臣)がこのまま貧しく一生を終えることなどあるはずがあるか。今年の間だけは、心を強く持って共に我慢してほしい。

(3)私は何の過ちも犯してはいないのに、いったいどんな罪によってとがめられるのであろうか。

問二 (イ)女の夫であった朱買臣の、日が暮れるのを待ちかねて、暮れるとすぐに女を召し寄せたという行為。

(ロ)貧しさに耐えられず自分の方から去っていった妻ではあるが、人知れず恋い慕い探し求めていたところ、ひどく落ちぶれた姿でいるのを偶然見つけ、国守となり何不自由ない自分が、すぐさま救ってやりたく思う心情。

問三 豊かな暮らしができるような身の上になった私とあなたが連れ立って、故郷の会稽に錦を飾ることができたであろうに。もしあなたが、今の苦しい境遇に耐え得る強い心を、二人が貧しかったころから持っていたならば。

〈第二講〉

『今鏡』

(一)御供には誰もお連れにならない方がよいでしょう

(二)まだ誰か聞いていないかと不安でございます

(三)武能の、雨の夜大極殿に忍び込んで笙の秘曲を聞こうとした行動が、熱意があると判断される。

〈第三講〉

《出典》『今物語』一八 打たれたる西行

【解答】

問一 (1)主人公の伏見中納言は外出して居合わせなかったときで

(2)あやしげな法師が、このように礼儀をわきまえないばかり振る舞いをしてることよと思っている顔つきで

(3)秋風楽をみごとに弾きこなしているのを聞いて

問二 秋風楽の素晴らしい音色に感動して詠んだ自分の歌の下の句に、上の句をつけて連歌することを求めた。

問三(1)「ことに」を「殊に」と「琴に」の掛詞とし、表面的な意味に加えて、秋風樂を弾く琴の音が我が身にしみ入るように素晴らしく聞こえるという意味を込めて詠んだ。

(2)あなたの私に対する応対が冷淡であるから、今日はことさら秋の風が冷たく身にしみて感じられるという、西行の自分の態度に対するあてつけの意味が込められたものと解した。

問四 侍が、知らぬこととはいえ西行を冷遇し、歌を詠んだ西行の意図もその内容も理解できず、さらには西行を殴りつけて追い出してしまったことに対する批評。

〈第四講〉

『栄花物語』

《解答》

問一 (1) ややもすると、俗世を捨て、仏道に入ろうと落ち着かれないのを

(2) (北の方は)これみよがしに(官位の低い道長を)重々しくお取り扱い申し上げなされたので

問二 正式に求婚なされた(九字)

問三 土御門の大臣(源雅信)の、まだ青二才で身分の低い藤原道長に対する軽侮。

問四 任せ(下二段動詞・連用形) 給へ(尊敬の補助動詞・已然形) れ(完了の助動詞・命令形) かし(終助詞)

問五 土御門の大臣が、自分の娘を今上帝や皇太子の后とすることについて。

問六 (I) 「さ」は「さる」の撥音便 「さん」の「ん」の無表記の形。「べい」は助動詞「べし」の連体形「べき」のイ音便。

(II) 家柄・官位が高く、女婿として適当な人。

〈第五講〉

『宇治拾遺物語』

(二)(ア)その人相見がある所へ出かけたが

(イ)この人を私に免じてお許し下さい。

(ウ)つまらないことをいう、わけのわからない人相見をする坊様だよ。

(オ)りっぱに往生を遂げて亡くなってしまった。

- (二) 往生するはずの人相をもった者が足を切られるのをこのまま見すごしたら、自分も仏の罰を受けるから。
(三) 後に名をあげるような人の人相を事前に見分けることは非常に難しく、普通の人相見にはできないということ。

〈第六講〉

『伊勢物語』

- (一) 男が女のもとへ通って行かなくなったこと。
(二) 私が絵を描いて下さいとお願い申し上げたことを、あなたは今になってもやって下さらないので。
(三) 通ってこなくなったあなたも、今の男もどちらも、私には頼りにならないという気持ち。

〈第七講〉

『梁塵秘抄口傳集』

《解答》

問一 (a) 重態になってしまった

(d) (まだ死ぬには早すぎると) 惜しまれる年齢ではないけれども

(g) これはどうかと不安に思っておりましたが、なんとすばらしいことよ

問二 後白河院

問三 乙前の病気が治るようにとの願いをこめて、薬師如来の功験を説いた今様を謡ったのである。

問四 自発の助動詞「らる」の連用形

問五 (A) 歌 (B) 経

問六 後白河院が乙前の一周忌の追善供養に、今様を一晚中謡って後世を弔ったこと。(三六字)

問七 乙前の今様を正統と認め、これを師として、その曲調に合わぬ歌は習い直すなどして奥義を極めたが、長年、情熱を傾け尽くした芸境を受け継いで、後白河院流などと、後世に伝える弟子のいないことが残念でならない。(九九字)

〈第八講〉

《解答》

- 問一 (イ) 幼い人というものは、みんなそんなものだと思うが。
(ロ) いとあさましうまさなう悪しくぞおはせし。
- 問二 (福足君がわがままにふるまって周囲の大人が手を焼くようなことになるだろうと思っていたよ。
- 問三 このように、人に対して思いやりが深いところがありませんでしたのに、どうしてご子孫が衰えてしまわれなされたのでしょうか。
- 問四 蛇をいじめて、そのたたりによって、頭にはれものが出来て亡くなった。
- 問五 まだ世間のこともわからない幼い子供心に、短い命のつらさを嘆き、泥土の中に菖蒲を植えて、死後、芽を出したのを「自分の形見として思いついてくれ」と言っているかのように、と亡き我が子への哀惜の念を詠んでいる。

〈第九講〉

泊析筆話

《解答》

- 問一 (1) 師が自分でその文章をよいと判断して、清書なさるときに至っては、間違っている事はほとんどなかったのである。
(2) やはり歌を詠む場合には、急いではならないのである。いまだかつて急いで詠んだ歌には、優れているものはない。
(3) 見る人すべてに向かって、「この文章は下書きも準備しないで書いたのである、だから少しの欠点はあるはずだよ」と、誰が事情を説明するだろうか。そんな人はいるはずがない。
- 問二 早吟の人は、すぐれた才能を持っていたとしても、早吟であるため、ともすれば考えの足りないことが交じり、また筆に任せて深く考えるに至らないこともあるので、早吟であるというだけでほめるのは間違いである。
- 問三 遅吟の作は、作成時に多くの推敲を重ねたため手際が悪いように見えたとしても、欠点のない秀作となれば、後世に伝わって誰もが納得して称賛することになる。
- 一方、早吟の作は、作成時は早い手際を評価され少しの欠点は見逃してもらえたとしても、後世に伝わったとき、作成時の事情を説明するものはいないので、欠点ばかりが目につき高い評価を受けることはない。

〈第十講〉

『栄花物語』

《解答》

- (一) 法師と同じように仏道修行をして過ごしてはいるが、実際には出家していないこと。
- (二) (イ)すばらしいと聞いているのに、
(ウ)自分が出家した後の莊園の適切な事務処理のことなどをおっしゃりなどして、
- (三) 大納言はすでに出家を決意しているというのに、その妨げになる肉親という執着にとらわれて思い悩んでいること。
- (四) 女御殿は、大納言の出家がいつであるかということとはご存じでいらつしやらない。
- (五) 大納言が出家し、二人ともこの世に生きていながら別れて辛く悲しい思いをするよりは、かえって自分が死んでしまう方がよい。

〈予備問題〉

『成尋阿闍梨母集』

《解答》

- (一)(ア)悲しみでわけもわからないようなありさまで、どちらが極楽のあるという西なのかなどもわからない。
(イ)子を思う母の深い心を汲み取って、わが子成尋を守ってやってほしい
- (エ)あきれたことに、私に会うまいと思いいなくなった成尋の心よなあ。
- (オ)成尋が真剣に実行しようと思いいなくなったことに邪魔だてしないようにしよう。
- (二) 夜中ごろに八幡宮へ参りましたので、渡宋の準備で何とも慌ただしく、母上にお暇乞いをせずに行くことになりました。
- (三) 日が経つにつれて、成尋の渡唐を泣いて引き留めることができなかつたという思いが募り、それが悔やまれてならないという心情。

《解答》

問1(イ)昔なじみの人などに会っているような気持ちがして

(ロ)別世界にやって来たような気持ちとする

(ハ)清少納言が貝の音に驚いたという、そのときの彼女の表情を見るようだ

(ニ)(定家の中納言の塔は)現代風であって、(本物だとは)あまり信用できない

問2(ヘ)『源氏物語』がすべて虚構の話であることを認識していないということ。

(ト)『源氏物語』に登場する玉葛の君が実在した人物だと思っているということ。

(チ)『源氏物語』を実話だと思い込んだ人が、玉葛ゆかりの跡を勝手にこしらえ出したのだろうかということ。

(ホ)滑稽きわまりない(八字)

問3(A)①「はやく」が《昔》の意の「早く」と、川の流れが「速く」との掛詞。②「立ち」が《有名になる》意の「名に立ち」の「立ち」と、「瀬々の岩波」が「立ち」との掛詞。

(B)「かね」が、初瀬の寺の「鐘」と、《以前から》の意の「かねて」の「かね」との掛詞。

問4 国学

問5 賀茂真淵・荷田春満・契沖などから二人

《全訳》

さらに険しい山道を進み続けて、長谷寺に近くなったところで、向かいの山あいを通して葛城山や畝傍山などがはるか彼方に見え始めた。自分にとっては他国ながらも、このような名所は常に書物でも見慣れ、歌にも詠み慣れているので、昔なじみの人などに会っているような気持ちをして、たちまち親しく感じられる。「けはひ坂」といって急な坂道を少し下る。この坂道からは、長谷寺も初瀬の里も、目の前近くに鮮やかに見渡せるその景色のすばらしさは、何ともいいようがない。大体ここまでの道は山の中であって、特にこれといって見る所もなかったが、このように威厳のある僧坊や御堂が立ち並んでいるのを急に見つけたときには、別世界にやって来たような気持ちをする。与喜の天神と申す御社の前に下り着いて、そこに板橋を渡してある流れが初瀬川であったのだよ。川向こうは初瀬の里であるので、人を泊める家に入って行き、食事などをとって休息する。宿の後方は川岸に片方を掛けてある建物であるので、川波の音が床のすぐ下にとどろいている。

初瀬川は昔から世にその名をとどろかせてきたが、今もあちらこちらの瀬で岩に当たった波が立っている。

さて御堂に参ろうと出発する。まず総門を入って、回廊式の階段を登ろうとする所に、誰のことかは知らないが道明の塔というのが右手にある。もう少し登って脇を折るように曲折した所に貫之ゆかりの軒端の梅というものもある。また、蔵王堂、産霊(総社)などが並び立っている。ここから上を雲居坂とかいう。こうして御堂に参り着いたところ、ちょうど御帳をあげたときで、たいそう大きな本尊がきらきら輝いて見えなざるのを、他の人が拝むので自分も伏して拝む。さてあちらこちら見てまわるに、この山の花は大部分が盛りを少し過ぎていたが、まだ盛りであるのも所々にたくさんあ

る。巳の時(午前十時)というので貝を吹き鐘をつく音が聞こえる。昔、清少納言が参詣したときも、急にこの貝を(寺の者が)吹き出したので驚いたということを書き置いてあるのが自然と思ひ出されて、当時の清少納言の表情を実際に見るような気がする。鐘は御堂のすぐ傍らの、今登つて来た呉橋の上にある楼に掛かつていたのだった。

有名な長谷寺の鐘の音のことは以前から聞いていたが、その鐘の音を今こうして聞いているのだなあ。

古歌の中にもたくさん詠まれた昔の鐘と同じ鐘なのだろうか、たいそう慕わしい。このような所では、特に目立つことのない物でも見聞するにつれて心に留まるのは、総じて、古^{いにしへ}を慕う心の癖なのだよ。(中略)

また御堂の中を通つて、あの貫之ゆかりの梅の木の前を通つて片側へ少し下つて、学問をする高僧たちの庵のそばに「二本の杉」の跡といつて小さい杉がある。また少し下ると、定家の中納言の塔だという、五輪の石が立っている。(この塔は)現代風であつて(本物だとは)あまり信用できない。八塩の岡という所もある。さらに下つて川辺に出、橋を渡つてあちらの岸に玉葛の君の跡といつて庵がある。墓もあるというが、今日は主人の尼が何かしにどこかへ出掛け留守であるときなので、門を閉ざしてある。およそこの初瀬に、その跡あの跡といつて多くの旧跡がある。どれも皆嘘っぽい中では、この玉葛の跡こそとても滑稽だ。あの『源氏物語』はすべて虚構だとも認識せず、(玉葛を)実在の人物であつたと思ひ込み、このような旧跡をこしらへ出したのであろうか。

『十訓抄』

《解答》

問一 ①いかめしく ②からき ③あやし ④やすから ⑤はかばかしき

問二 三輪の市

問三 (h)信じられないこと (j)気味が悪いこと (l)うめき声をあげること (m)葬られた所

問四 (a)築く(ハ行下二段活用動詞「かまふ」の連用形)

(c)準備する(ハ行下二段活用動詞「かまふ」の連用形)

(e)必ず。きつと。(副詞「かまへて」の一部)

(d)全然。まるつきり。(打消の語と呼応する副詞)

(n)紛れもなく(強調、確認の副詞)

問五(1)二人心を同じくすれば、其の利きこと金を断つ。心を同じくするの言は、其の臭ひ蘭のごとし。

(2)二人が心を合わせれば、その鋭利さは金をも断ちうる。心を合わせたものの言葉は、蘭の芳香のように香ぐわしい。

問六(b)生き物にとって命ほど大切なものはない。

(g)力をお貸し申し上げたならば、どうして敵をお討ちなされないことがありましようか、いや、きつとお討ちなされるでしょう。

(k)刺そうとしたどの箇所も刺し損なうということはない。

《全訳》

昔、中納言和田麿という方がいらつしやつた。その子孫に余五太夫という武士がいた。長年の間三輪の市のそばに城を築いて構えを立派にして住んでいるうちに、敵に攻められて、城もやぶられ兵もすっかり失つてしまった。かろうじて身一つ命だけは助かつて長谷寺の奥にこもつて住んでいた。敵は探していたけれど、十分に用心をして笠置という山寺の岩屋のあつた所に隠れて二、三日するうちに、岩屋のそばに寺蜘蛛という蜘蛛の巣をかけた所にある所に大きな蜂がかかつていたのを、蜘蛛が糸を巻きかけて蜂を殺そうとするときに憐れみの心をおこして、蜘蛛の巣から蜂を取り放してやつて、言ったことには、「生き物にとって命ほど大切なものはない。前世の功德が少なくて、畜生として生まれたけれど、命を大切に思う心は人間と変わらぬ。恩を重んずることも同じであるだろう。私は敵に攻められて辛い目にあつてゐる。身につまされるのでお前の命を助けよう。必ず思いわきまえてくれ」と言つて放してやつた。その夜の夢に柿色の水干と袴を着た男が現れて言うことには、「昼におつしやられたこと、すべて耳に残つております。あなた様のお志まつたくかたじけなく思つております。私はつまらない蜂の身ではございますが、どうしてこのご恩を知らないことがありましようか。どうぞ私の申し上げるままに準備をなさつてください。あなた様の敵を滅ぼしてさし上げましよう」と言う。「どなたがこのようなおつしやるのか。私にだ」と言つと、「昼間、蜘蛛の巣にかかつておりました蜂は私です」と言う。不思議に思ひながら、「どのようにして敵を討つことができるのか。私に従つていた者どもも九割がたは死んでしまった。城もない。まるつきり争うことのできる方策もない」と言へば、「それは何とおつしやることではましようか。生き残つてゐる者たちがございますでしょう。二、三十人ほどを必ず説きお集めください。この後ろの山に蜂の巣が四、五十ほどあります。これ

らの蜂も私と同じ志の者です。説得して集めて力をお貸し申し上げたならば、どうして敵をお討ちなされることがありませんか、いや、きっとお討ちなされるでしょう。ただしその戦いをなされる日は、決してそこに敵を近づけてはなりません。もとあつた城の近くに仮屋を作つて、そこにひょうたん、壺、徳利のようなものを多く置いてください。だんだん蜂が集まり申し上げたならば、そこに隠れていようとするためです。云々。その日にうまく(やりましょう)と約束して去つたと思ううちに夢がさめてしまった。信じられないことだが、たいそうありがたいことだと思われて、夜にまぎれてふるさとに戻り、あちこちに隠れていた者たちに語つて言うことには、「自分は生きていくがいがいがない。最後に矢一つでも射て死のうと思つて見た夢のままに準備したので、「これは何のためのものか」と不思議がるので「このような理由があるのだ」といつて用意をした。その朝、ほのぼのと夜が明けてくる頃から、山の奥の方より大きな蜂が百、二百、二百、三百と群れて集まつてくる様子はたいそう気味が悪く見えた。日が出る頃に敵のもとへ行き、「ここに居りませぬぞ、さあ姿を現しなさい」と言つたので、敵は喜んで、「探し損ねて心穏やかでなかつたのに、たいそう幸いなことだな」と三百騎ほどが討つて出てきた。勢いを比べるともの数ではないので、相手を侮つて、早速駆け寄り組み打ちをするうちに、蜂たちは仮屋より雲霞のごとくに湧き出て、敵一人に二、三十から四、五十がとりついて、目鼻も区別せず、武器のすき間を刺しまわつた。手足や懐に入つて刺そうとしたどの箇所も刺し損なうということはない。殺しても、三、四十ほどが死ぬだけである。(蜂といふ)敵に出会うということまでは思いもよらず、今は目をふさいで、うめき声をあげ、すき間を刺されまいとしてあわてはためくうちに、弓矢の方向もわからなかつた。こういう状況であつたので、(余五太夫は)思いのまま駆けまわり、敵三百余騎をしばらくの間に簡単に殺すことができたので、思いがけずもとの地に戻つたのだつた。死んだ蜂が少々あつたのを笠置の後の山に埋めて、その上にお堂を建てて、毎年蜂の忌日として蜂の恩に報いた。その子孫が落ちぶれた後、この寺を敵の孫であつた法師が、「祖父の敵となつた蜂の葬られた所である」と言つて、焼き払つてしまったので、たいそう愚か者であると、奈良を追い払われてしまった。まったく蜂の如き短小な者でも、仁智の心はあると言へることだ。

【解答】

問一 それにしてもお前の目つきは殊勝なことよ。殺されることが悲しいからといって、どうしてお前に金品を与えようか、いや与えない。新しく仕事をやるのなら、金品を与えよう。そうでなければ仕方がない、さあ、早く殺せ。

問二 自分の言葉に盗人が感動し、ああ恐ろしい方だ、こんな危ない目にあつても動揺せず、大切なことを教えさとしてくれた人はいないと心服し、悔悟のさまが明らかであつたので、その潔い、男らしい態度をよしとした。

問三 あなたのありがたい教えが身にしみ、強盗などやめると約束しましたが、部下たちが嘆くの引かれて、また悪事に走ってしまいました。この分では、縄目にかかり遠からず死ぬでしょうが、あなたに心服し、また私の心中も包み隠さず申し上げたのを奇縁として、どうかこの金で後々の供養をお願いしたい。

問四 その家の主は、盗人の送ってきた金でその菩提を弔い、残った金を後々の回向のために使えと子孫に言いおいたので、子孫たちは、百回忌の追善をして僧をよび、人々に物など分け与えた。

【通釈】

いつごろのことであつたらうか、商人の家に盗人が入つて、主人の寝ているうゑに馬乗りになり、刀をその胸にあてて「金品のある所を教えろ、そうしなければ殺すぞ」といった。あるじの男は目をさまし、じつくりと盗人の顔を見て「それにしてもおまえの目つきの殊勝なことよ。殺されることが悲しいからといって、どうしておまえに金品を与えようか、いや与えない。新しく他の仕事をするのなら、金品を与えよう。そうでなければ仕方がない、さあ、早く殺せ」という様子は、何とも思っていないようなそのまなざしに、盗人も（その体から）飛び下がって、ばらばらと涙を落しながら、「ありがたい教えです。それにしても恐ろしい方だ、これまで幾十人かの人を（このように）押さえ込んだが、（あなたのように）こんなことをいった人がいただらうか、（いや、いない）。また、こんなにすばらしい教えも聞いたことがない。今からきつぱりと（所業を）改めます」といって、頭を伏せふり仰ぐこともない。あるじの男は起き出して盗人に金品を与え、「本当におまえは（誠の）男であることだ。それなら行け」というと、（盗人は）その金を押しもどして「私には金の不自由はありません。ただ私の部下たちは百人を越すのですが、（その者たちに）物を与えるために（こうしたことを）するのです」といって、そのまま退出した。次の日の夕暮れに、どこからともなく、袋に物を入れ、手紙を添えて主人さまに差し上げて下さいといつて、邸に投げ入れて逃げた者がいた。あるじがその手紙を見ると、「思いがけない（あなたの）ありがたい教訓は、この身にしてみても（本当に）そうだと思い申しました。他の仕事をしようと約束しましたが、部下たちが嘆くの引かれて、またまた強盗をしてみました。この身の果ては（きつと）お上のお縄にかかることでしょう。罰せられた後に、私の後世をどうか弔っていただきたい。（こんなことをお願いして）恐縮いたしておりますが、この前の夜にお会いし、あなたの（ありがたい）お心も知り、私の心中もお見せ申したことを前世からの因縁と思つて申すのです。これはそのためのものです」と書いて

て、黄金を幾枚か袋に入れてあった。年月がたったあと、その盗人は釜ゆでにされた。あるじはかわいそうに思って、いつていたように、例の金でその死をねんごろに弔い、残った金を将来の追善の費用として（残し）、きつと忘れずにいよと子孫にいいおいたということだ。ずっと後になって、盗人の百年忌だといって、僧侶を招き追善し、人々に物など分け与えた人は、そのあるじの子孫であったということだ。その盗人は有名な石川（五右衛門）という者であり、そのあるじの住んでいたところは、五条のあたりだと言い伝えている。

《解答》

問一 (1)昔詠んだとかいう歌が自然と思ひ出されて

(2)袖が露でびっしりとぬれている

(3)葦やかっみなどが一面に生い茂っている中に

問二 (結び方)已然形「けれ」となるはずのところは、「ける」と連体形になっている。

(事情)本来なら係り結びのために已然形となるはずであるが、接続助詞「が」が続いているため、結びが流れたのである。

問三 いへゐ

問四 無常観

問五 鎌倉幕府が開かれ、京都と鎌倉との往来が盛んになり、街道も整備されたから。(三十六字)

問六 問A ④・⑤

問B 波は西日を沈め紅にして淵淪たり

《要旨》

明け方、瀬田の唐橋を過ぎると、琵琶湖がはるかに見え、満誓沙弥の歌を思い出して一首詠んだ。やがて野路に着いたが、草の露のため旅衣の袖もびっしりとぬれた。篠原では池の面に美しい風景が浮かび、蘆手絵のようであった。以前は都を出た旅人はこの宿に泊まったが、今は通り過ぎる者多く、世の移り変わりは飛鳥川の淵瀬に限られたことではないのだなあ、と思われた。